
ヒカリ

トモリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒカリ

【Zコード】

Z86920

【作者名】

トモリ

【あらすじ】

「くだらない」それが葵^{アオイ}がこの世界に対し思つこと。

そして不思議な青年との出会いにより、物語は大きく動き出す。

1 不思議な青年

光にいる少女は思いました。

「Jの世界は眩しそう。私にこんな光、必要ない。

闇にいる少年は思いました。

光に行ければきっと心から笑うJができるのJ。

そして一人は思います。

『Jの世界から逃げ出すJができるばどんなにいいJだらう』

蒼すぎる空を仰ぎ、彼女は思つ。

私に光なんて必要ない。

光があつてもありのままの自分が映し出されて嫌になるだけ。
そして自分の影が濃くなるだけ。

誰か私を・・・

私をJのまぶしすぎる世界から連れ出して。

朝。
葵は家の玄関を出るとため息をついた。今日も憂鬱な一日が始まつたのだ。

最近思つこと……それはこの世界のくだらない。

毎朝同じ時間の電車に乗り、同じ時間へ学校へ行く。そして皆と同じ制服に身を包み、同じ勉強をする。

(……くだらない)

「……はー」

毎朝の同じ光景を毎日しながら、葵は学校の門をくぐった。

葵の通つている高校は、そこら辺では名のしれている、男女共学の県立高校だ。共学といつても男子とほとんど口をきかない葵にとっては男子はただウザいだけの生き物にすぎない。

そして葵は汚れた上履きに履き替えると、重い足取りで2階へある自分の教室へ向かつた。

授業中。

「久保田さん……」

「……はー」

葵は英語の先生に呼ばれ、のろのろと自分の席から腰を上げる。「ぱつ~としてないでこのbe動詞を適切な形に直してみなさい」

「……分かりません」

「こんな問題をも解けないようじや、進学できませんよ……では、

その後ろの人！代わりに答えなさい」

葵は先生の言葉を聞き流すと、力なく再び自分の席へ腰を下ろした。

(はー・・・)

葵はこつも思つ。こんな勉強をして将来いつたいどんなことに役に立つのだろうか。きっとこんなこと、意味のないことだ。

(くだらない)

休み時間。

「ねーねーーー！ 昨日のテレビ見た！？ くん、チョーかつによくない？」

「見た見た！ チョーかつによく良かったよね！」

そんな会話が葵の耳に入る。葵はいじくっていた携帯電話に視線を戻すとため息をついた。

なんでそんなに憧れる必要があるのだろう。一方的な感情だけで相手は「こちらのことを見ているわけでもないのに」。

(くだらない)

「葵ちゃんーーー！」

よく一緒に帰る友達、透子に声を掛けられた。

「一緒に帰るーーー！」

透子は、葵とは正反対のとても明るく前向きな性格で、そんな透子はいつも葵のことを気にかけてくれる。

「うん」

葵はいつものように答えた。

しかし葵は、こんな優しい友達がいても、心の奥底までは明るいこ

気持ちにはなれなかつた。透子ともきつと高校までの付き合いになるだろ？。これも一時的な友情にすぎないので。

(くすつ。みーつけた)

その、どこからか聞こえてくるような微かな声に、葵は気づくはずもなかつた。

「ただいま」

「お帰り！あおちゃん！」

葵が自宅の玄関の扉を開けると、すぐに葵の姉、清音^{キヨネ}が迎えてくれた。

清音は葵より2つ年上で家から車で30分ほどの大学に通つている。今日は、早めに終わつたらしく、家に1人でいたらしい。

「家に誰もいなくて寂しかつたんだよー。あおちゃんが帰つて来てよかつたあ」

「・・・あつや」

葵はそつけなく答えると、スタスタと2階にある自分の部屋へ向かつた。

「・・・あおちゃんの大好物のシュークリーム買つて来たんだけどなあ」

その言葉を聞くと、ピタつと葵の足が止まつた。

「ねつ！？一緒に食べよー？」

葵は少し戸惑つてから、「うん」と答えた。

「 - で。最近どう?」

清音は、口にショークリームを頬張りながらそう尋ねる。
「別になにもないよ」

葵も口に着いたクリームをなめとりながらそれに答えた。

「 - ・ - なんか最近元気ないから、何かあったのかなあって思つたんだけどなあ

「だから何もないって!」

「・・・ふーん。恋の悩みでもあるのかなあつて思つちゃつた! - 」

「・・・あおちやんは何でも内にためこむじやう癖があるんだから、何かあつたらお姉ちゃんに言つよみーーー」

清音は優しい瞳で葵を見つめる。

「・・・分かつたあ?」

「・・・・分かつた、分かつた・・・・・ありがと」

最後に言つた言葉は聞こえたかどつかは分からぬが、葵はスッ
と立ち上ると、「いじそうさま」と言つて自分の部屋へ向かつた。
少しふりむきをいけど、葵はそんな姉が好きだった。

その日の夜。

葵はろくに勉強もしないで、ベットにぐらぐらこんだ。瞳を閉じる
とそこには、真っ暗な闇の世界が広がつていた。
葵はこの闇が嫌いではなかつた。

ぐだらない事ばかりの世界より、何もない世界の方がいい。そう思つ時もよくあつた。

(「いっそ、こんなくだらない世界なら……」)

「消えてしまえばいいのに……でしょ？」

突然頭の方から、おもしろがつてているような青年の声が聞こえてきた。

「……！」

葵は心臓の飛び出る思いでベットから体を起こすと、自分の頭の上を見上げる。

それと同時に視界に飛び込んできたのは、空中で胡坐をかき、葵を見下ろす青年の姿だ。

「ほんばんは……」

青年はニヤニヤしながら言つた。

しかし葵は、すぐにまたベットに潜り込む。

(「……これは夢に違いない。だって知らない人間がこの部屋にいるわけないし、むしろ空中に浮かべるはずがない」)

葵は今の状況が理解できるはずもなく、頭の中を必死に整理しようとする。

「くすり」

笑い声とともに、ストッと床に足をつける音が聞こえた。その途端、いきなりふとんを引き扱われる。

「……！」

葵はあまりに突然の事に、そのままの姿勢で固まる。

「くすすすす……今までで、君の反応が一番最高だよ……くつく・

・」

視線を動かすと、そこには、笑いをこらえている青年の姿があつた。

乱して着ている、白いTシャツの下には、これまたまつ白いズボンを履いている。髪は、外国人のような茶の色に、少しウェーブがかっていた。

「へー。こいつが、100人目のお供かあ！」

今度は、目の前に、親指より少し大きい位の、小さな男の子が現れた。

「わっ！…」

葵は飛び上がり、後ずさりすると、そのまま後ろの壁に背中をぶつけてしまう。

「くつく・・・ふふつ・・・」

今度はさつきの青年が、笑いをこらえきれなくなつたように笑いだした。

「おい！…ライト！…おまえ、笑いのつぼ浅すぎだぞ！…」

「ふふ・・・はー『めん』『めん』。ギイン。」

田の下に浮かんだ涙を指で拭いながら、真っ白な青年 ライトはそう言つた。

「…・・・・・あんたたち、何者？」

葵は掌が汗ばむのを感じながら、そう、問いかける。

「ふふつ。ひ・み・つ」

ライトが、人差し指を唇に合せて、奇妙な笑みを浮かべて言つ。すると、小さな男の子 ギインは顔を歪めた。

「うわ。きも！…」

「じゃーまたね！葵」

ライトは、ギインの言葉を聞くつもりはないいらしく、そういう残すと、その場からスッと姿をかき消した。

「おい！… 待てよ！…」

その後につづいて、ギインも、同じように消えた。

「…・・・・・」

葵はただ茫然と、一人が消えた空間を見つめることしかできなかつた。

カーテンの隙間から、朝日が射し込んできた。びつやうむう朝が来たらしい。

葵はベッドから起き上がる。それと同時に昨晩のことが脳裏によみがえった。

(・・・やつぱり夢だつたのかもしれない)

葵はベッドから起き上がると、こつものよつに顔を洗い、髪をとかすために洗面台へと向かう。

寝ぐせのついた髪をとかしていると、葵はある違和感を感じた。

(なんかいつもと違つよーな・・・)

ふと髪を搔き揚げると、葵は驚きのあまり息をのんだ。

(なにこれー?・・耳が・・・ー?)

そこには、いつもと違つ形の耳があった。いつもは当たり前のように先が丸くなっているはずの耳。その先端が尖つてこる。まるでゲームやアニメの中の登場人物のようだ。

葵は、自分の耳を疑つた。

(これ・・本当に自分の耳?)

「あおちゃん、おはよう!ー」

そこに突然、清音が入つて來た。

「!ー!ー!ー!」

葵は驚きと混乱のために、その場で固まる。

「? あおちゃん、どうしたの? そんな驚いた顔して?」

清音は、何事もなかつたかのように、葵に話しかけた。

「べつ・・・べつに・・・」

「・・・ふーん。まついいけどね。それよりも朝、はよん食べないと、お母さんが片付け始められないから早くしてね?」

「ううん・・・」

清音がその場から立ち去ると、葵は安堵の息をもらした。

(よかつた・・・お姉ちゃん気づかなかつたみたい・・・。それにしても、何で急に耳がこんな形になつてるんだろう・・・)

そして葵は、もう一度髪を搔き上げて、自分の耳を確認した。

それは、やはり先が尖つている。

(やっぱり見違ひじゃない)

ふとその時、昨晩の青年のいたずらっぽい笑みが、脳裏に浮かんだ。

(・・・もしかしてアイツと関係があるんじゃ・・・?)

「あおちゃん! はやく!」

清音の、元気な声が聞こえてきたので、葵はひとまず耳を髪で隠すと、朝食へ向かった。

(もういえば、私の事100人目の中の子供って言つてたけど、どういう意味? つていうか、何の100人目・・・?)

葵はやはり昨晩の事が気になつてしまふがなく、通学の途中、毎日満員電車の中で、そんなことをぼーと考える。

「葵ちゃん! !

突然かけられた声の方向へ振り向くと、そこに元気に手を振つている透子の姿があつた。

「おはよ! !

「おはよう! !

葵は、少しどきまきしながら答えた。透子や他の人に、自分の耳が見られたら大変だ。

「透子、今日は部活の練習はないの?」

葵はそう尋ねる。透子は合唱部に入つていて、毎日朝練があるので、葵と同じ電車に乗るのは珍しい。

「葵ちゃん何言つているの？今日からテスト一週間前でしょ？」

透子は、朝練をやらなくてすんでうれしいのか、少し弾んだ声で言つた。

「あつ・・・・・そうだね！」

（そうだ。もう少しでテストだ）

しかし葵にとつては、勉強する氣には全然なれなかつた。

テストでいい点数をとれたとしても、将来いつたいどんな役に立つというのだろう。葵にとつては、意味のない事に思えて仕様がなかつた。

（ぐだらない）

その時、葵にとつもと違つた感情が生まれた。しかし、それに違和感はない。むしろ、それに解放感を覚えた。

「葵ちゃんどうしたの！？怖い顔をしてるよーーー？」

「えつーーーそうーーー！」

葵はとつとん答えると、そこへ「大丈夫。いつもと回じだよ」と付け加えた。

（こんな意味の無い事をしてはいるんなら、今日学校をさぼつてしまおつ）

それは、初めての気持ちだった。

（学校、さぼつちゃつた・・・・）

葵は、学校から離れた公園にいた。平日のせいが、そこには葵しかいないようだ。そして、近くにあつたブランコに腰をかけると、ため息をつく。

（学校、さぼつちゃつた・・・・）

透子には、具合が悪いので家に帰ると言つておいた。

学校側に、ばれることはないだろう。

（あーでも、さぼつたはさぼつたで暇だなあ）

まあ、学校でぐだらない授業を受けるよりはましだが。

「くすす。学校さぼっちゃた～！」

「…」

葵がびっくりして振り返ると、そこには昨晩会った青年、ライトがいた。

ライトは、うれしそうな顔で言った。

「こんばんは！」

葵は何で朝なのに、こんばんはと書つんだらうと不思議に思つたが、そこにはあえてつゝこまないで、一番言つたかった事を最初に口にする。

「ね～。ここの耳、あなたのせいでしょう？」

「…ふふ。そつちの方が、かわいいじゃない？葵」

「…は…」

かわいいと言われ、葵の口からは、気の抜けた返事しか出でこない。不思議と悪い感じはしなかつた。

「お～…すいぶん変化したなあ！…」

「…」

急に田の前に、またギインといつ小さな少年が現れた。良く見ると口にドラキュウのよくな、小さな2本の牙が生えている。

「へ～や～と魔界の住人ら…・フゴ～！」

ギインの口を、急にライトが押さえつけた。

「ふふ。僕達ちよつと急に用事を思いだしたから、今日の所はかえるよ」

「フゴ～！」

ライトは、ギインの口もとを押さえつけながら、爽やかな笑みを

浮べて言つた。

「えつ…ちよつと…」

葵が言い終える前に、2人はスッと葵の視界から姿を消した。

（魔界の何つて言つた人だろ？…・？良く分からなかつた…・・・）

そして、ふと耳に手をのばすと、葵はまた驚きのあまり息を飲ん

だ。

耳は髪から出るほど細長く尖つていて、髪で隠せる程の大きさではなくなっていたのだ。

葵はあせつた。急に、こんな変な耳になつてしまつて、これからどうしていけばいいのだろう。

（絶対、あの2人が怪しい……どうにかして元に戻してもらわないと……）

「見て見て！！」

急に、少し遠くの方から、子供の声が聞こえてきた。

（見られた！？）

葵は、反射的に耳を手で覆つ。しかし、無残にも手から耳が突き出てしまつていた。

そこには、子供とその母親らしい人の姿があつた。

「ねえねえ。ママ。なんでお姉ちゃん、あんな所にいるの？」

子供が葵のことを指さしながら言つた。

「あら。なんででしょうね~」

母親が少し困つたような笑みを浮べながらそれに答える。そして2人の親子連れは、何事もなかつたように歩き去つていつた。

（…………たしかに見られたはずなのに……？）

葵には安心感と、それに対する不思議に思つ気持ちも湧き起つてきた。

（…………もしかしたら……）

この耳は、普通の人には見えないかもしない。見えていたら、さつきの子供は、なんで耳が尖つているの？と聞いただろう。

「ただいま~」

葵は、二つもの帰宅時間に合せて、家の玄関のドアを押しあけた。しかし家には誰も帰つて来ておらず、葵の声だけが空しく家の中に響いた。

（今日は、お姉ちゃんも帰つて来てないんだ）

葵の両親は、一人とも働いているので帰つてくる時間も遅い。

だから、姉が帰つて来ていない時は、葵は一人でいることになつてしまふのだ。

（・・・まあ慣れてるけどね・・・）

葵は鞄を放り投げると、洗面所へ向かつた。そして鏡で自分の姿を映してみた。そこには、朝、鏡で見た自分とは違う、まるで妖怪のような自分の姿がある。

「・・・変な姿・・・」

葵はポツリと呟くと、バタバタと一階へ上がり自分の部屋のベッドに「ササ」と倒れこんだ。

（いつも暗い考えをしている自分は、こんな姿が似合つているのかもしれない・・・）

「あおちゃん!」

「・・・・・・・」

田を開けるとそこには、心配そうな顔で覗き込んでくる、清音の姿があつた。どうやら二つのまにか寝入つてしまつてしまつていてらしい。「どうしたの?制服のままで寝ちゃうなんて、具合でも悪かつた?」

「・・・うん。べつこ」

「そつかー。それなら早く着替えて下へ降りてきて!…もう夕飯できるつて!」

「・・・うん」

そして清音は、バタバタと下へ降りていった。

葵は、手を耳へ伸ばした。やっぱりそこには、葵の耳でない耳があつた。姉も何も言つてこなかつたので、やっぱりこれは普通の人には見えないらしい。

（やつぱり、この耳は私と、あの一人にしか見えないんだ・・・）
そして葵は、制服を脱ぎ捨ていつのも楽な服に着替えると、重い足取りで下へ降りていつた。

「ふふつ。もうあの子葵は手に入れたと同然だね！」

ライトは口元にニンマリと笑みを浮かべる。

「うつしゃーーこれでやつと100人そろうー長かつたあー
ギインがくるつと一回転しながら、嬉しそうに答えた。

「ふふ。そうだね」

ライトは答えると、自分達の周りを見渡した。

ここは、光の無い世界“魔界”。

ライトは、“一人目”なつてから光を知らずに生きてきた。闇に心を捕らわれし者は、光の中で生きる事を許されない。夢や希望で溢れる地上では、生きられないのだ。

だからこそライトは、再び光が欲しかつた。

そして再び地上で暮らしたかつた。普通の人間として。

（だからこそ僕には、葵が必要なんだ）

そう。闇に心を捕らわれし者が。

*
*
*
*
*
*

2 間を消す者

また朝が来た。朝は待たなくて済って来る。そして同じ毎日を運んでくる。毎日それの繰り返し。

「はー・・・・」

葵はため息をつくと、ベッドから体を起こした。

(今日も学校をさぼってしまったのか)

そんな考えが頭によぎった。

(でも、さつぼても暇だし・・・)

・・・・・しようが無い・・・・行くか。

葵は、チャイムが鳴ると同時に席についた。

一時間田は国語だ。葵は、国語が嫌いだった。(国語もかも、しれないが)

特に、国語の先生が嫌いだった。正直いつてウザかった。

退屈な授業中、葵はすることもなく窓の外を見ていると、突然、「久保田！――もっと集中しろ！――」

先生の怒鳴り声が耳に入つてくる。

耳が変化したせいか、いつもよつよつと聞こえてるような気がした。

そして葵は、ゆっくりとその場に立ち上がる。クラスの田線が一斉に葵に向けられるのが分かった。

「・・・・あんた、ウザイよ」

それと同時にその場の空気が凍りつく。

それでも葵は気にも留めなかつた。本当の事を言つたままでだ。怒りに顔を真っ赤に染める先生に葵は冷たい視線を向ける。

すると突然、誰かに腕を掴まれた。

「ちょっと来い！」

「！？」

葵は弓を張りながら腕を引つ張られながら、教室を出た。

そして、葵はそのまま屋上へ連れてこられた。

「つ・・！放して！…」

葵は無理やり相手の手をひきはがした。

「・・・・・」

相手はただ葵の目をじっと見据えると、落ち着いた口調で、「」立派な発言で」と、だけ言つた。

「・・・あんた誰？」

葵は、むつとして相手を睨みつける。

「俺は、ササヤマシゲキ笠山繁樹。ちなみにあんたと同じクラスの2年B組で、出席番号15番のB型17歳」

繁樹は、スラスラ読むように「う」と、再び見透かすような視線を葵に向ける。その顔には、笑みのひとつも浮かんでいない。

「・・・つーか、クラスの奴の名前と顔くらい覚えておけよ」

「・・・・・」

葵は何も言わずに、パツと目を反らす。

（なんか、こういう人苦手・・・）

だから男子は嫌なのだ。このなれなれしさが、葵は嫌だった。

「ところでその耳なに！？」

「……」

葵はその言葉に、息を飲んだ。

(「この人には見えている……？」)

葵は直感的にやばいと感じ、その場から走り去り、としました。しかし、後ろから急に肩を強く掴まれた。

「……」

「逃げんなよ」

すごい力だ。葵の力では、到底かないそうにない。すると今度は、首に腕を回されてぐつと引き寄せられた。

「……放して……」

「……久保田には悪いけど、これが俺たちの仕事なんで。“カリウド”としてのね」

「……？」

葵は意味が分からなかつた。でも、今自分が、危険な状態にあるのは確かだ。

「もう闇の存在になつつあるお前には、消えてもうつ必要があるんだよ」

葵のすぐ背後から、氷のように冷たい声がそう囁つ。

葵は意味が分からず、何も言つことができなかつた。今、葵にあるものといえば、絶望と恐怖だけだ。

と、その時葵の中に“何か”が生まれた。そしてそれは葵の恐怖心をすべて消し去つた。

(何で私は、こんなことで怖がつているのだろう)

すると葵は、繁樹の腹に力強く肘打ちをいた。

「……？」

そして、休む間もなく拳をこぎり、繁樹の顔面めがけてそれを振るひ。

しかし繁樹は、すばやく手のひらで葵の拳を受け止めた。

「……そんな攻撃、俺に当たるとでも思つてんの？」

すると繁樹は、体勢を低くし、右足で葵の足をくつた。

葵はその場で倒れこむ。

そして、繁樹は葵の体の上に、なんのためらいもなく、ドカッと腰を下ろした。

（つ・・・これじゃ、体が動かせない・・・）

倒れた時に打ったのか、頭がガンガン痛んだ。

「俺に抵抗しても無駄なんだよ。おとなしくしろよ？」

繁樹は、長めの黒髪が葵の頬に触れそうな位顔を近づけて、鋭い目つきをして言った。

いつの間にか手には銀色に不気味に光った、長い刀のよつな物が握られている。

「大丈夫。久保田の心にある闇を斬るだけだから、痛みは感じない。まあ、あんたの存在自体が闇になりつつあるから、消滅はするかもしないけど」

「・・・・・」

葵は何も言えなかつた。ただ繁樹の冷たい瞳をじつと睨みつけた。

「笠山くん」

急に屋上の入り口の扉の方から、声が掛けられた。そこには一人の女性が立つてゐる。葵と同じ位の年齢の、おとなしそうな人だ。

「・・・世紀」

繁樹は葵から手を放すと、今度は世紀といつ名前らしい女性に向かつて言った。そして、「今回は見逃してやるよ」とボソつと言うと、サツと立ち上がり入り口からスタッタと姿を消した。

世紀は目線だけで彼を見送ると、ゆっくりと葵の方へ近づいてきた。

「大丈夫？」

世紀は葵に手を差し伸べながら、優しい笑みを浮かべて言つ。

しかし葵は、世紀の手を取らずに、俯きながら黙ってしまった。見たところ、世紀は繁樹の知り合いらしい。彼女にも、何かされてもおかしくないのだ。葵には世紀を信じることができなかつた。

「葵ちゃん・・・? どうしたの?」

世紀の言葉に、戸惑いがあるのが感じられる。

目線を動かしてみると、不安そうに自分を覗きこむ彼女の顔があつた。

「・・・・・大丈夫。私は・・その・・・・・ 笹山くんのようにはしないから。・・・・・大丈夫。・・私を・・・・信じて・・?」

葵はその言葉に、少し驚いた。人から“信じて”と言われたことは初めてだった。葵は、この人は悪い人ではない、そう感じた。

「・・・・ごめん。大丈夫だよ」

葵はスッと立ち上がり、スカートの埃を払い落としながら言った。

隣で世紀の表情が、緩んだのが分かった。

良く見ると、身長は葵より高く、大人っぽい雰囲気をもつた女性であることが分かった。

「もう少しでお昼だし、お弁当食べながら一緒に話してもいい?」

「・・・・うん」

葵は世紀の言葉に少し戸惑つたが、悪い気はしなかつたので、一緒に食べることに決めた。

「じゃ、昼休みになつたら裏庭に集合しよう?」

「・・・・分かった」

そして二人は、それぞれの教室へ戻つていった。

「ごめんねっ!――葵ちゃん!」
葵が裏庭のイスに座つて待つていると、慌てた様子で世紀がやつてきた。

「待つた!?」

「つうん。私もさつきたところだから」

葵はそつけなく答えると、お弁当を広げ始めた。

「・・・・あのね、話したいことがあるんだけど・・・

世紀は、葵の隣に腰を下ろしながらソファに座った。

「……うん。なに？」

葵はお弁当のおかずを口に運びながらそれに答える。

「……あっ！…そうだ。その前に自己紹介しないとね。私は、有^ウ」

水世紀^{スイセキ}。ちなみに、あなたより一つ上の三年だよ」

世紀はそう言い終えると、曖昧に微笑む。

「私は……久保田葵」

葵はチラッと世紀に田線を合わせるとそう呟いた。

「……で、話したい事って何？」

「……葵ちゃんの……その……耳の事についてなんだけれど……」

世紀は躊躇いがちにそう呟いた。

「……！」

葵の箸が止まる。……彼女にもこの耳が見えるんだ。

「……だから何？私を馬鹿にしにきたの？」

葵は自分でも信じられないような怒りを覚えて、ガタッとイスから立ち上がる。その時、世紀の飲みかけのお茶がぐらぐら揺れて、テーブルから落ちた。

「……」

世紀は今にも泣き出しそうな顔をして葵のことを見上げている。

「……あ……」

世紀は何か言いかけようとしたが、葵の強い田線にたえられなくなつて、すぐに口を閉じた。

さすがに葵も、自分が悪く感じられて、すぐにまたイスに腰を降ろした。

「じめん……」

「……ううん。大丈夫。葵ちゃんがそんな気持ちは分かるか

ら」

世紀は静かにそつと落したお茶を拾つてテーブルにのせる。

「……なんであなた達には私の耳が見えるの？」

葵が一番気についていた事を聞いてみると、世紀は少しの沈黙のあ

と、口を開いた。

「・・・私達は選ばれた存在だから」「選ばれた存在？」

「・・・そう。神様に選ばれた存在。信じられないかも知れないけど、私達は生まれたときに、特別な力を授かつたの」「どんな？」

葵は彼女の口から出る異様な言葉に顔をしかめ、そう尋ねた。

「・・・そうね。簡単に言えば人の心の闇を消す力。人は心の闇が多すぎると、魔界の人に目をつけられて、その住人にされてしまう。だから葵ちゃんのその耳は、魔界の住人になる一歩手前。私達は今までそんな人たちを見つけて心の闇を消す手伝いをしてきたの」

葵は意味が理解できなかつた。私が魔界の住人になる一歩手前？全然意味不明だ。つまりあのライトとギインは魔界の人ということなのだろうか。

「・・・だから私は、あなたを心の闇から救いたい」「・・・」

「人には心の闇が必ずあるものだと思うの。でもそれに負けては駄目。人間は、辛いことや嫌な事、悲しい事が会つても前に進まないといけないの。逃げてばかりいたら、いつか心が闇に支配されてしまう。そしてそのままだと、私達がいる地上にいる権利を失つてしまつの」

「・・・」

すると、世紀は葵の目をじっと見据えた。

「たとえ、この世界にくだらなさをかんじてもね」

葵は言つ言葉が見つからなかつた。ただ黙つて俯く。

「でも私には、葵ちゃんの心の闇を消す手伝いをしてあげられるわ世紀が手を広げると、そこに十字架の形をした綺麗なキー ホルダーのような物が現れた。

「笹山くんの場合は剣だったけど、私の場合はこれ。人によつてこ

の形は変わるみたい」

その時始業のベルが鳴った。

「・・・本当は私達の力無しで心の闇を消せるのが一番なんだけどね」

世紀はそう呟くと「じゃ、またね」と言い残し、葵の前から立ち去った。

（心の闇を消す・・・）

葵は世紀の背中を見送ると、その場から腰を上げる。そう言われても、なにをどうすればいいのか分からなかつた。けれど、これだけは分かる。

（このままじゃダメだ）

葵達が立ち去つた後の、中庭に生える木の太い枝の上。そこにライトとギインは姿を現した。

「どうすんだよ・・・ライト!!!」

ギインはライトに向かつて大声で怒鳴る。

「このままじゃ葵を“100人目の子供”にできないぞ!!!」

しかしライトは、ギインの顔を見てもただいつものよつに微笑むだけだ。

「あ、一つたく!! 協力してる俺の身にもなれよ!!」

「・・・そんなにイライラしてると血圧あがるよ~」

ライトは落ち着いた口調でそう言つと、馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

「-つ!!」

「・・・大丈夫。葵は心の闇には勝てないから」

ギインは目を丸くしてライトを見る。

「そのためには、ちょっと手を加える必要があるけどね」

「葵ちゃん...」

葵が教科書をカバンに入れ、帰る支度をしてると透子が話かけてきた。

「今日すこかーたねー！私ひーぐりしたやた！」
葵は今日、国語の時間に言つた事を思い出した。
あれはやばかつた。葵は今になつてそう感じた。
(きっと眞、私を軽蔑した目で見るに違ひない・・・)

— . . . !

葵は少し驚いた。透子はそんなふうに思ってくれていたんだ。少し嬉しい。

んじゃ、
私部活あるからまたね！」

葵は手を振つて透子を見送つた。

次の中。葵はこつものよつべジの田の中で田を覚ました。今日は土曜日なので学校は休みだ。

土曜日なので学校は休みだ。

葵はどちらかというと、友達と出かけるたりするより、家で本を読んだりテレビを見たり、音楽を聴いたり・・・などをして休日を

過ごすのが好きだった。

他人とかかわるのが嫌い・・・といつ意味ではなのだが、誰かといるより一人でいるほうが落ち着いた。

「あおちゃん！起きてる？」「

一階から清音の声が聞こえてきた。葵は眠たい目をこすりながら返事をする。

「うん。起きてるよ」

「んじゅーちよつと下降つてきて。話したことあるからーー！」

「ん~。はいはい」

葵はもう少し寝てないと困ったが、目が覚えて寝る気にもなれなかたので、しかたなく一階へ降りていった。

「ねえねえ！今日、うちの大学でオープンキャンパス開くんだけど、あおちゃん来ない？」

「・・・は・・・」

葵ははつきり言つて大学には興味がなかつた。まあ将来の夢も無いので当たり前の事かもしぬないが。

「まだ、将来の夢とかないんでしょ？それなら、この機会に何かやりたい事とか見つかるかもしないよ？」

「・・・」

たしかに、そうかもしれない。少なくとも、何もしないよりはまだしだい。

「うん。・・分かった。行くよ」

清音は一瞬、驚いたように田中を見渡べと、そのあとヒヒヒヒと笑つた。

「よしー！–じや、着替えてきてーすぐ出発するから」

「うん」

そして葵は、着替えるために再び二階へと向かつた。

「ほーらーーあおちゃん。ここが私が通つてる大学よーー！」
清音は一人の目視界に入つてきした茶色の建物を指差すと、嬉しそうにそう言つ。

「ふーん」

葵はそつけなく答えると、周囲をぐるりと見渡した。そこには、公園に生えてそうな木が何本か並んでいて、その奥には大学の建物が、ずらつと並んでいる。・・けつこう大きな大学らしい。

そして葵のすぐ隣では、噴水が水しぶきをあげていた。
(へー。大学つて重苦しいイメージがあつたけど、縁もいっぱいあつて、大きな公園？みたい・・・)

「ねえ。お姉ちゃん

「・・・・・」

「お姉ちゃん？」

姉からの返事がないので、不安になつて振り返ると、案の定、そこにはさつきまでいたはずの清音の姿が消えていた。

「・・・・まじ・・・・！？」

周りを見ても知らない顔ばかり。葵は完全に清音とはぐれてしまつた。

葵はその場に立ち尽くすことしかできなかつた。

・・・さて。これからどうするべきか。

はぐれたあたりの周辺を歩き回ったが姉は見つからなかつた。携帯もつながらない。周りが騒がしいので聞こえないのだろう。きっとあつちは、葵が勝手についてくると思つて後ろを気にせず行つてしまつたに違ひない。

「はー・・・・」

葵は深いため息をついた。

(こんな事になるなら来るんじゃなかつた)
と、その時後ろから肩をたたかれた。驚いて振り返ると、そこには爽やかな笑みを浮かべて立つてているライトの姿があつた。

「ライト！」

葵は少し安心した。こんな時、知つてゐる人に会えると安心するものだ。

「・・・・・こんばんは」

葵は顔をしかめる。

また“こんばんは”？今は昼間なのに。

「・・・ふふ。今、何で昼間なのに“こんばんは”なんだろう？…つて思つたでしよう？」

「・・・え・・・・」

「・・・つまりね。僕たちには“こんちは”と言つ権利がないんだ。

“こんちは”は光で溢れる田中に言つうもの。闇に心を支配され、魔界で生きている僕たちにとつては言つ権利も無いし、必要なない言葉なんだよ

「・・・・・」

(必要の無い言葉?)

するとライトは葵の顔を覗き込む。

葵は驚いてライトの目を見たまま固まつた。良く見ると、外国人

のよつなブルーグレーの瞳をしている。

「わかつた？葵」

「・・・」

葵は思わず後ずさる。

「ふふ。そんなに警戒しなくていいのに。とつて食べたりしないから」

ライトは明らかに笑いをこらえていた。

葵はむつとして顔をしかめた。どう見てもライトは自分の反応を楽しんでいる。

（・・・つていうか、さつき“魔界で生きてる”つて自分の事言つてた・・・？やつぱり、ライトは世纪さんが言つてた“魔界の人”つてこと・・・）

「・・・ライトは“魔界の人”なの？」

ライトの顔が一瞬、歪んだように見えた。しかしその顔は、すぐにいつもの笑顔にかき消される。

「そんな可愛い耳をしている葵のほうが“魔界の人”っぽいけどなあ」

「・・・」

「変つて思つてるみたいだけど、僕はかわいいと思つよ」

「・・・」

葵はお世辞だとしてもその言葉が少し嬉しかつた。顔がほのかに熱くなるのを感じる。

人からかわいいと言われたのは初めてだつた。葵は恥ずかしくなつて思わず顔を伏せる。

「それじゃ、行こうか？」

「・・・え・・・」

「来るんじゃなかつたつて思つてたんでしょう？」

「・・・」

（つていうか、なんで私が思つてること分かるの）

「・・・葵の顔見れば大体考えてる事が分かるんだよね」

「・・・・・

すると突然右手をつかまれた。そしてライトは葵の手を引っ張る
と、歩き出す。

「・・・・・・・・・

葵が軽く声を漏らしても、ライトは気に留める様子もなく、どんどん前へ進んでいく。

しばらく進んだところで、葵はもう我慢できなくなつた。

「ちょっと！放してよ！――」

葵はライトの手を無理やり振り解いた。

「・・・・・どうしたの？」

ライトはまるで罪悪感の無い顔で葵を見つめてくる。

「・・・・・だって、お姉ちゃんが探してるかもしないし・・・」

「・・・・・そうかなあ

「え？」

するとライトはにんまりと口元に笑みを浮かべた。

「だって、――はそのお姉ちゃんの学校なんでしょう？お姉ちゃんも偶然に友達と会つたりなんかして、そんなに葵の事気にしないかもしれないよ？」

「・・・・・・・

（たしかに・・・そうかもしねり）

清音は、どちらかと云ふと忘れやすい性格だ。今頃、大学の友達と楽しくおしゃべりに没頭していくてもおかしくない。

・・・それなら、必死に探しても自分が馬鹿みたいじゃないか。

「ね？ そうでしょ」

「・・・・・

葵はぽつりと呟いた。

「じゃ、こいつか」

ライトは伸び口元に笑みを浮かべると、葵の手を引き戻し出した。
(どうせ、こんな所にいても将来いくと決まったわけでもないし、意味がない。こんなくだらない所にいるなら、違う場所で過ごした

ほうがました・・

行き先は分からぬ。けれどそれはライトに任せることにした。

特別行きたい所があるわけではなかつたし。

その時、ライトがいつもとは違う、奇妙な笑みを浮かべている事に葵は気付くはずもなかつた。

「あおちゃんへどこへ？」

そのころ、清音は葵の名を半分あきらめながら呼び続けていた。もうこれを始めて30分以上はたつていてるだろ。これも自分が、後ろを確認せず、勝手に歩いて行つてしまつたせいなのだが。（きっと、こんな初めての場所に一人じゃ不安になつてる・・・早く見つけてあげないと・・・）

と、その時誰かに服の裾を掴まれた。

「！？」

驚いて振り返ると、そこには小学3、4年生くらいの少年が今にも泣き出しそうな顔で立つていた。

「・・・どうしたの？」

清音はどちらかと云ふと、子供が好きなほうだ。こんな泣き出しそうな少年を見て、ほつておけるはずもなかつた。

「ぼつ・・・僕の風船・・」

そう言つと、少年は少し先にある木を指差した。そこには赤い風船が引っかかつていて。

「よしよし。今、取つてあげるからね」

清音はなだめるように言つと、その木まで少年の手を引いて歩く。

「取つてあげるからここで待つててね」

清音はそう言つと風船を取りにかかった。風船は、あと少し手を伸ばせば届きそうな枝に引っかかっている。

（あと少し・・・）

清音は精一杯手を伸ばす。その時、後ろから伸びてきた誰かの腕が清音の首を引きよせた。

「！－！えつ・・・・」

驚いて肩越しに振り返ると、そこにはさつきまで泣いていた少年の顔があつた。それも彼は重力を無視して、清音の背の高さまでフワリと浮かんでいる。少年は清音の顔を見るなりニヤリと笑つた。

「じめんね、おねーちゃん！－！」

そう言つたかと思うと、少年は清音の首に自分の口を近づけた。その瞬間、首筋に何か鋭い痛みがはしる。

「－つ・・・・？」

清音は声にならない叫びをあげると、そのままずくまり氣を失つてしまつた。

「・・・まあ、オレの牙にかかるば、今まであつたことは忘れて眠る事ができるから安心しなよ」

得意そうな笑みを浮かべて立つている少年、ギインがそう呟くと、ほぼ同時にその体がシユルシユルと親指くらいの大きさに縮んだ。

「それにも、大きさを変えて実体化するのは疲れんなあ～」

ギインは首をコキコキと鳴らすと、「邪魔者排除」

と呟いて人ごみの中へ姿を消した。

ライトはまだ歩き続けている。もつとまきまでいた大学は、葵達のはるか後方に見える位になつてしまつた。

葵はただライトに導かれるままに歩くだけだ。そして二人は、人

通りの少ない裏路地にさしかかった。

「ねえ。ライト・・どこ行くの？」

葵はライトの背中に向かって控えめに声をかける。

「ふふつ。秘密…」

ライトは「ゴゴ」と笑みを浮かべながら答えた。そしてまた、何事もなかつたかのように歩き続ける。

葵にとつて、ライトはいつも笑つてゐるよつに見えた。いつも不機嫌な顔をしてゐる葵とは大違つた。

それとも・・ライトは心に持つてゐる闇をしまじこんで、表面だけで笑つてゐるのだろうか。

葵にとつてライトは“本当の自分”を隠してゐるよつに見えた。笑顔は本当の自分を隠すものにすぎないのかもしれない。葵はそう感じた。

「さて・・もうそろそろいいかな」

ライトは独り言のように呟くと歩みを止める。そして腰をかがめると、視線を合わせるよつに顔を葵の正面までもつてきた。

「…」

葵は驚いて反射的に顔を背ける。

（いつたいなんなの・・）

後づさううとしたが、腕をしっかりと捕まれていて動くことがで

きない。すると、耳元で甘く囁くような声が聞こえてきた。

「・・この世界つて、本当にくだらない事だらけだよね」

「・・・・・」

「ほほじやない、別の世界に行つてみてもいいと思わない？」

その声は葵の心のなかに優しく響きわたつた。

ここじやない、別の世界が本当にあるとしたら、葵は行つてみたかつた。こんなくだらない世界からなら、別に逃げ出してもかまわないかもしねれない。

「葵、僕の事をみて」

またあの優しい声が聞こえてきた。葵はその声がする方へ、ゆつ

ぐりと顔を動かした。

「おい！！久保田！！」

突然、怒鳴り声が葵の耳に飛び込んできた。反射的に振り向くと、そこにはクラスメートの笙山繁樹が仁王立ちで立っていた。

「んなどこで、なにしてんだよー？」

「・・・・・」

「それにあんな奴と」

繁樹は不機嫌にそう言つと、顎でライトの事を示す。

ライトは掴んでいた手を離すと、ニコッと微笑んだ。

「へえ。君には僕が見えるんだ」

「つたりめーだろ。お前は魔の存在だからな」

繁樹は奇妙な笑みを浮かべると、手を前に差し出した。

するとそこに、一本の刀が現れた。全身が銀色に輝いていてとても綺麗な刀。たしかあの時、屋上で持つっていたものだ。

「へえ。今でも“カリウド”的族がいたとはね」

ライトはそう言つと、フワッと浮き上がり繁樹の前に着地した。（へつ！？今つていつたいどういう状況！？ていうか、ライトって普通の人には見えないの？）

葵は意味が分からなかつた。出来ることといえば、ただ今日の前で起こつている事を呆然と見守ることだけだ。

「そんなに余裕でいいのかよ？あ？」

そう言つと繁樹は、刀の刃をライトの首筋に近づける。あと数ミリ動かせば切れる位置に、ライトの首があつた。

ライトは動じる様子もなく、腕を組むとかすかに微笑んだ。

繁樹の表情が歪んだのが分かつた。

「ふふ。君こそ余裕しそうだけど大丈夫？」

ライトがそう言つた途端、繁樹は素早く刀を振り下ろした。

ライトはそれを軽くかわすと、後ろにあつた壇にふわっと飛び乗つた。

「 - チツ - - - - - 」

繁樹は軽く舌打ちをすると、ライトの乗っている壙を刀で切り刻んだ。そして休む間もなく、バランスを崩したライトに向かって刀を振り下ろす。

「・・・っあ・・・」

葵は軽く声を上げたが、壙が崩れた時の砂埃で一人の姿を確認する事ができない。

「すごいねえ。その刀、壙も切ることができるんだ」「砂埃の中から馬鹿にしたような声が聞こえてきた。良く見ると、砂埃の中に一つの人影が立っているのが見えた。

「！」

葵は田の前で起こっている事が信じられなかつた。

繁樹の振り下ろした刀が、ライトの前にかざした手の直前でピタッと静止している。まるでライトの手の前に、見えない壁があるようだ。

繁樹の刀が力を入れているにもかかわらず、静止した状態でブルブルと震えているのが確認できた。

「悪いけど、僕には魔力というものがあるんだよね」

ライトは睨みつけている繁樹に向かって、ニコッと微笑んだ。

「・・・それじゃ、今度は僕からいこうかな」

ライトがそう言つとほぼ同時に、前にかざした手から針のようなものが何本も、繁樹の顔を田掛けて飛び出した。

「つ！-！」

繁樹は刀で防ごうとしたが間に合わず、それを横にジャンプしてかわす。

「ふふ。よく避けられたね」

ライトはそう言つと、今度は両方の手を刺激に向かって突き出した。

「・・・くそつ」

繁樹はそう呟くと、再びライトに向かって刀を構える。その顔には、たつき斬ったのだろう、血が滲んでいた。

(・・・どうしよう。このままだと、繁樹くんが危ない・・・)

葵は、このままでは繁樹が一方的にやられて終わるだらう、そう感じた。

「ちょっと・・・」

葵は一人に向かつて控えめに声を掛ける。

「久保田は口出しすんじゃねえーー！」

葵の言葉を聞き取った繁樹が、イライラした様子で葵の言葉をさえぎった。

（そう言われても、あんたが負けそだから声を掛けたんですねケド・・・）

負けを認めて諦めてしまえば楽なのに、葵はそう感じた。繁樹も自分が不利な立場にあるのは分かつていいはずだ。それなのに、なぜ向かつていけるのだらう。

「・・ふふ。良く頑張ったね。繁樹くん・・？」

ライトは突き出していた手を引くと、そう呟いた。

「は？」

繁樹はその言葉に目を丸くする。

「僕、こりこり戦いはあまり好きじゃなんだ。だから今回は終わりにしよう！」

「・・・逃げんのかよ？」

「別にそういう意味じゃないんだけどなあ

「・・・・・」

すると繁樹の持っていた刀が、スッと手の中から消えた。

「今回は諦めてやるよ」

「ふふ。それはどうも」

睨みつけていた繁樹に対し、ライトが微笑んで答えた。

（よかつた）

なんとか、一人の戦いが終わった。これもライトが自ら引いてくれたお陰だ。葵は少しライトに感謝した。

「来いーー久保田ーー！」

「はっ？」

繁樹は乱暴に葵の手を掴むと、大股で歩き出す。

「つ・・・ちょっと…」

葵がそう言つても、繁樹はそれを無視して歩き続ける。葵は後ろを振り返つた。

そこには、微笑んで立つてゐるライトがいた。

「また迎えに来るよ」

ライトはそう言つと、その場から消えた。

「私の事は斬らないの？」

葵は、繁樹に無理やり連れてこられた公園のベンチに腰をおろすと、静かに問いかけた。

「・・・おまえを生かしておけば、またアイツが来るかもしんねーしなー！」

繁樹はぶつつきらぼうにそつ答へた。

「・・・」

そして葵と少し離れた場所に、どかっと腰を下ろした。

「・・・つーか、アイツにのこのこと、ついていくなよー！」

繁樹は葵とは目を合わせずに、前を見て言った。

「・・・何で？」

「アイツはお前を魔界に連れて行くに決まってるだろーが」

「・・・・・・・」

葵は“魔界”といふ言葉を聞いて少しどキッとした。ライトは魔界の人であることを忘れていた。

「世紀から聞いてねーのかよ。アイツは久保田を魔界の住人にして、魔界に連れていくとしてんだよ」

葵は息を呑んだ。世紀はたしかに、そのよひな事を言つていたよ
うな気がする。

「まつ。それは久保田の気の持ちようになるか、ならないかは決まつてくるけどな」

—
●
●
●
L

「いつまでも心に深い闇を持つてちゃあ、本当に魔界の住人になつちまうぞ？」

分が二つある

葵は下を向いてぼそっと呟いた。もうそんな事は世紀に聞いて知っていた。でも心に深い闇を持たないようにするのはどうすればよいのだろうか。

葵にはその答えが見つからなかつた。

このまま魔界の住人になつた方がましだろう。

葵はそこ思つた

「知ってるか？人は誰でも心に闇を持つてるものなんだぜ？それをどうやって乗り越えていくかが問題なんだよ！－」
繁樹は前を見据えて力強くそう言つた。

葵は繁樹の横顔から視線を外す。

“三一書記”

1

その時、ポケットに入れておいた葵の携帯が鳴った。

あべこめん

葵はそう語りうと、繁樹に背を向けて携帯にてた。

あつ！あひやん！？

「もしもし

「お姉ちゃん？」

葵は姉の声を聞くと、罪悪感に襲われた。姉を大学に残して、出てきてしまった事が頭をよぎった。

今何してるの？

「…ごめん」

え！？

「だつて私、お姉ちゃんを残して先に大学出ちゃったでしょ？」
すると、少しの沈黙のあと再び声がした。

ん～。そうだつて？私、今日大学には行つたけど、あおちゃんとは行つてないような気がするけど・

「は・・？」

それより、こんな時間まで何してるの～？早く帰つて来てよー

「え。ちょっと・・」

その瞬間、電話は切れてしまった。

姉が自分と一緒に大学へ行つた事を覚えてないという事は、どういう事なのだろうか。葵には意味が分からなかつた。

・・・それとも、これはライトの仕業なのだろうか。

「おい！～もう帰れつていう電話じゃなかつたのか！？」

葵の隣で繁樹はそう怒鳴る。

「えつ・・・まあ」

「それなら、とつとと帰れ！」

そして繁樹は足を組み、再び視線を前に向けた。

「あ・・・じゃあ、帰るから」

葵はここにいても仕方ないと思つたので、ベンチから腰を上げた。

「じゃ・・・またね」

一応、控えめに声をかけると、葵は視線をチラツと繁樹に向けた。

「・・・おつ」

繁樹は視線を前に向けたまま、それだけ答えた。夕日に染まつた彼の顔は、少しだけ寂しそうに見えた。

ライトは自室のベッドで天井を見つめていた。

ここは魔界。魔界といつても、光で溢れている地上とほとんど変わりはない。違うことといえば、朝が来ない事。光が無いことだつた。そしてそれは、ここに住む人達にとつては普通で当たり前な事なので、気にならない事だ。むしろこの住人は、この暗闇を心地よく感じている。

・・・・ライトを除いては。

ライトは天井から畳を外すと、寝返りをうつた。

ヤンかい立中の混じた声でドアを猛烈に開けて入ってきた。

「なに? ギイン」

う答えた。

ハナ お 城 に は い て と て は い て お
舌 バ ら つ 二 二 二 ニ リ リ リ

ライでせりふはアマリ、ベッドから起き上がりそこで腰を下ろす。

ギインは自分の話が流されたことに腹を立てたのか、ぶすつとした表情になると、人差し指をビシッとライトに向かえた。

排除したのに！」

• • • •

「もしかして諦めたとか！？」

「……ん、なわけないでしょ！」

ライトは伏せていた顔をギインに向けると、奇妙な笑みを浮かべて言つた。そして「自分で決めたことだしね」とそこに付け加えた。

「安心したよな？」

ろした。

「——諸君いかがなれども、

ギインは田を輝かせながら、ライトの田を覗き込むと呟いた。

卷之三

るだけだ。

「・・・ライター、聞こへるか?」

「ギンガライトの突然の断葉」

「いいつて何が・・・」

ライトがその言葉を言い切る

声が聞こえてきた。

視線を向けると、そこには大柄な男が立っていた。その髪は肩につくほど長めで、それを後ろでポニー・テルに縛っている。そしてそれは、炎のような真っ赤な色に染まっていた。

「…」めん、キン、外してくれるか？」

ギインはその場の雰囲気を察してか、素直に「分かったよ」と言つて部屋から出て行つた。

「お前のわざを詫びたかった言葉が、もう口に出さない禁句だったはずだも？」

その男は髪と同じ色の真っ赤な瞳を細めて、重みのある声でそう言

う。そして、さっきまでギインが座っていた場所に静かに腰を下ろした。

「分かつてます・・アフューカスさん」

ライトは落ち着いた声でそう言った。

「・・しかしこの部屋も何も変わつてないな。ベッド以外、何もありやしない」

その男 アフューカスは周りを見渡すと、口元に笑みを浮かべながら言った。

ライトは彼と目を合わせずに、目の前の壁に視線を向ける。

・・ライトはこの男の目を見るのが嫌いだ。あの時を思い出すから。地上にいた自分を思い出すから。闇に染まってしまった自分を思い出すから。

・・・そう、彼こそが自分にこの世界を与えた人物だつた。“光”

に居場所がなくなつた自分を“闇”に連れてきた人物だつた。

そしてライトは再び光に戻りたかつた。

あの人に会つたために。自分を心から信じてくれたあの人に。

「光流^{ヒカル}！起きてるの？朝^ヒはん、早く食べちゃつて！」

朝、目を覚ますと母の呼ぶ声が聞こえてきた。

「はい」

光流はまだ完全に覚めてない目をこすりながら、返事をする。そして軽い足取りで一階へと降りていつた。

そう。ライトは光流だった。地上にいた頃は。

「おはよ。お兄ちゃん」

「おはよ。美森」^{ミヤマツ}

すでに向かい側の席で朝食を取っていた、妹の美森が可愛く笑つていつものように挨拶をする。

そして美森は素早く箸を動かして、一飯を口に放り込んだ。

「何か用事でもあるの？」

光流は味噌汁を一口啜ると、美森に問いかけた。

「ん~。今日から合唱部の朝練があるんだ」

美森は口をもぐもぐさせながら、忙しそうに答えた。

「あら。確か、もうすぐコンクールだったわよね？」

さつきまで台所に立っていた母が、自分の朝食を持つて光流の隣に腰を下ろした。

「うん~! 去年は補欠で出られなかつたけど、今年は出せてもうれると思つうんだ」

美森は箸を止めると、目を輝かせて弾んだ声で言った。

「ねつ~! お兄ちゃん、私頑張るから、本番見に来てね。母さんと父さんと一緒に」

光流は美森が合唱部に入つてたのは知つていたが、歌つている姿を見た事は一度もない。

「うん」

光流はそう答えると、美森に笑いかけた。

そして美森も光流に笑い返した。そして再び美森は、忙しそうに箸を動かし始める。

光流はその笑顔を、決して失わせてはいけないと思つた。

兄として。

家族として。

「いつてきまーす！」

美森はそう言つと、居間のソファーに置いてあつたカバンを掴んで、玄関から飛び出していつた。

「いつてらつしゃい！」

母はそう言つと、「いつも美森はあわただしいんだから」と呟いて、洗い物を片付けるために流し場へ向かつた。

「そうだね」

光流は笑みをこぼすと、制服に着替えるために席を立つ。

「光流もそろそろ準備しなくて大丈夫なの？」

「うん。今からするところ」

光流はそう答えると、一階へ上がるために階段へ向かつた。とその時、二階から降りてくる足音が聞こえてきた。

「おはよう。父さん」

光流は父に声をかけると、スタスターと一階へ向かつた。

「・・・おー」

父は視線で光流を見送ると、頭をポリポリとかきながら台所のテレビに置いてあつた新聞を手に取り、イスに腰を下ろした。

「今起きたんですか？」

母は洗い物に視線を向けながら、静かに父に問いかけた。

「まあ・・・」

父はそつけなく答えると、顔を隠すかのように新聞を広げて読み出した。

「美森は・・?」

「もう出かけましたよ」

「・・・・・そうか」

そして母は父の前に、静かに味噌汁と一緒に飯を置いた。

「あなた・・・」

そして思いつめたような顔をすると、静かに口を開いた。

「いつてきまーす」

とそこに光流が、台所の扉から顔を出して一人に声をかけた。

「いつてらしゃい」

母はいつものように微笑むと、光流を見送った。そして玄関の扉の音を聞くと、再び静かに口を開いた。

光流はいつものように、学校へ続く道を一人でもくもくと歩いていた。

光流は今年、高校三年で受験生だ。“受験生”という言葉は光流にとってあまり苦痛ではない。将来の夢があり、それを叶えるために努力する。その事に光流は幸せを感じるからだ。

夢があるから頑張れる。光流はそう思っていた。そして、いつものように校門をくぐった。

その日の放課後。

光流は参考書を選ぶため、街中にある書店に来ていた。そして手頃なものを手に取ると、レジで会計を済ませる。

（今日も帰つて勉強だな）

大学受験までまだ日はあるが、今のうちから勉強をしていて越したことはない。

そしてエスカレーターを下りつとした所で見覚えのある姿を発見

する。

(美森・・?)

横で一つに結わえた黒髪。そして毎日毎日している中学の制服。彼女は間違いなく美森だ。

(何でこんな所に・・)

美森は今、エスカレーター近くにあるゲームセンターにいた。そして一番手前にあるクレーンゲームに熱中している。

(話しかけてみるか)

光流はそう思い、美森に近づく。

普通なら、今の時間、美森は部活動に取り組んでいるはずだ。こんな場所にいるなんてこと、まずあり得ない。

「 - !」

その時、美森の影から一人の少年が姿を現した。学ランに身を包み、小柄でおとなしそうな顔をした彼は美森に何か話しかけると、楽しそうに笑う。そして美森もそれにつられるようにして笑った。

(友達と一緒になのか・・)

光流は足を止めると、一人の様子を窺う。一人は光流に気づく様子はなく、たつた今クレーンから落としてしまった縫いぐるみについて盛り上がりしているようだった。

(放課後、友達と遊んでも別に普通だよな)

光流はため息を漏らす。よく考えてみれば、部活動が何かしらの都合でなくなる可能性だって十分にあるのだ。だから、こんな場所にいても全然不思議じゃない。

(帰るか・・)

少し寂しいのは気のせいではないだろう。

「 - !」

その時、美森の隣にいた少年と目があつた。

彼は肩越しに光流を見ると、口元に笑みを浮かべる。

光流はドキリとして素早く視線を外すと、足早にエスカレーターに乗り込んだ。

(何なんだ・・アイツ)

光流は何とも言えない気持ちを抱きつつ、エスカレーターを下る。
・・・・ そんな柄の悪そうな人間ではなさそうだし、問題はない
だろう。

その時はそう思った。

その日の夜。

光流は父親と母親と共に夕食を食べていた。しかし空いている席
が一つ。そこに座るはずに美森の姿はなかつた。まだ家に帰つてこ
ないのだ。

「美森から何も聞いてないの? 光流」

母はその場の沈黙を破り、そう尋ねる。

「・・・ ああ」

光流は端的にそう答えた。

「部活が長引いているのかしらね・・・ 心配だわ。学校に連絡入れ
たほうがいいかしら・・・」

「大丈夫だよ。美森のことだから、きっとすぐに帰つてくるよ
光流は母親に微笑んでみせる。きっと、男友達と遊んでいた、と
言つたら余計に心配するに違ひない。

今頃、美森は何をしているのだろう。光流は脳裏によぎつた嫌な考
えを頭の隅に追いやる。

・・・ でも、きっと美森なら大丈夫だ。あんなに合唱に一生懸命な
美森なら。きっとすぐに帰つてくるだろう。

光流はシャーペンの動きを止めた。時計を見ると、やく午後10

時。・・・美森はまだ帰ってきていない。

光流はさすがに心配になつてきただ。あの少年の笑みが脳裏によぎる。

(美森・・・いつたい何しているんだ)

その時、一階から玄関の扉を開ける音がした。

「・・・・・」

帰つて来たのは美森のようだ。母親と玄関で話している声がする。そして次に階段をゆづくつ上がりてくる音がした。

「・・・・・」

光流はシャーペンを置き、イスから腰を上げる。そして自室の扉を開けた。

「！・・お兄ちゃん・・・」

美森は突然現れた光流に驚いたのか、大きく目を見開く。しかしそれはすぐに光流の視線から逃げるようにして伏せられた。

「こんな時間まで何してたんだ？・・・心配したんだぞ」

光流はできるだけ平常心を装い、そう問い合わせた。まさか、こんな時間まであの少年と遊んでいたとでもいうのだろうか。

「つ・・・『ごめんねつ・・・心配かけちゃつて・・あのね、部活が終わつた後、友達と本屋さんに行つたの。そしたらいつの間にかこんな時間になつちゃつて・・・」

美森は困つたように微笑んだ。

「・・・嘘だろ？」

光流自信にもこの感情はもう抑えることはできなくなつていた。

「今日は部活なんて行つてないんだろ！？そして遊んでた。男友達とゲームセンターでな！」

美森に対してもこんなにも自分の感情をぶつけたのは初めてだ。悲しみと怒りが心の中で真黒な渦を巻く。

すると美森の表情が悲しみにゆがんだ。

「つ・・・『ごめんねつ・・・でもね、私・・・」

「部活はどうしたんだよ！？あんなに頑張つてただろ！？」

美森の顔を見、心が痛んだが、今はそんな事気にしている余裕なんてなかつた。自分の感情はもつ、自分自身にもどつすることもできない。

「・・・・・私、部活、辞めてきたの」

美森はとても言い辛そうにそり啖いた。

「・・・・・」

「あのね、私ね・・・」

「美森がそんな事するなんてな。部活を辞めて男と遊ぶなんてサイテーだよ・・・」

すると美森はとても悲しそうにその顔を歪めた。

「・・・・・お兄ちゃんなんて大嫌いっ！！！」

震える声でそり啖ぶと、美森は光流の前を通り過ぎ、自分の部屋に飛びこんだ。

「つ・・・・・」

光流は閉じられてしまつた、美森の部屋の扉を見つめることしかできなかつた。

次の日の朝。

光流は目を覚ました。枕元の時計を確認すると、すでにお昼を回つていて。しかし今日は土曜で学校はないので問題はない。

光流はのろのろと重い体を起こした。昨日、あんなことがあつたせいによく眠ることができなかつた。

今、光流の心を支配しているのはあの時のような真黒な感情ではなく、静かすぎる後悔だけだ。何である時、自分の感情を抑えることができずに美森を傷つけてしまつたのだろう。もう一度、美森と話がしたい。

(・・・妙に家の中が静かだな)

もうお昼を回っているというのに、下からは何の物音もしない。

光流はその妙な静けさに違和感を覚え、ベッドから抜け出すと一階へ降りて行った。

リビングの扉を開けると、そのテーブルに母だけがポツリと座っていた。どうやら光流が入ってきたことに気づいてないようだ。

「母さん？」

「光流・・おはよう」

母は光流の顔をみると、力なく微笑む。

「美森は？・・・それに父さんは出かけたの？」

「・・ええ。一人して買い物に行くつて・・」

母は光流から目をそらすと、静かにそう答える。

「そ、うなんだ・・」

光流は妙な空気を感じ取りつつも、母の隣を通り過ぎ、キッチンのあるスペースに向かった。

「何か作ろうか？」

母はそう尋ねる。

「んん・・大丈夫だよ。適当に食べるから」

光流は買い物置きしてあつた菓子パンを手に取り、コップに麦茶を注ぐと、再び母の隣に腰を下ろす。

そしてパンを食べきった頃、母が口を開いた。

「美森、合唱部辞めて來たつて今朝、話してたわよ

「・・・・・そうだね」

光流は昨夜のことを思い出す。美森はとても辛そうにそう話していた。あんな大好きな合唱を辞めただなんて、何か大きな理由があるはずなのに・・・でも自分はどうだらう。ただ、その時の感情に流されて美森を傷つけただけだった。

「美森、あんなに楽しみにしていたコンクール、出してもらえないくなっちゃつたんですね。音程をとることがなかなかできなくて、

皆と一緒に歌うと、音の響きを邪魔しちゃうって先生に言われたらしいのよ」

「・・・・・！」

「いつも遅い時間まで残つて練習してたのに・・・光流は大きく田を見開いた。・・・こんな事があつたなんて、全く知らなかつた。美森はこんなにも傷ついていた。それなのに自分は美森の話を聞こうともせず、さらに美森の心を傷つけた。自分はなんて愚かなのだらう。守るはずの笑顔を奪つてしまふなんて。

「母さんっ・・美森と父さんはどこへ出かけたか知つてる！？」光流はその場に立ち上がる。今すぐ美森に会つて、話をしたい。謝りたい。

「・・・分からぬわ・・・」

「！？じゃ、何時くらいに帰つてくるかは・・・」

必死にそう尋ねる光流の顔を母は見ようともしない。そして長い沈黙のあと、母は呟いた。

「一人はもうこの家には帰つてこないわ

「！？」

「光流と美森は気づかなかつたかもしけないけど、私と父さんの関係は前からうまくいってなかつたのよ。今日、父さんは家を出て行つた。父さんを一人にするのが嫌だからつて、美森のそこについて行つたわ」

「え・・・？」

光流の口からは掠れた声しか出てこなかつた。母は・・・母さんは何を言つているんだ！？

「ごめんね。光流」

光流はその言葉で確信した。もうこのテーブルに四人の家族が揃うことはない。今までの当たり前の日常は一瞬にして消え去つた。

「・つ！何でだよつ！？」

光流はそう叫ぶ。しかし母は顔を上げようとはしない。

「ふざけんなよっ！！なんで・・・なんで・・・一人を引きとめなかつたんだ！！何で美森を出て行かせたんだよっ！！？」

光流は「ふしを握り締め、母を睨みつける。そして家を飛び出した。

光流は住宅街をふらふらと歩いていた。

家には帰りたくない。このままだどこへ行つていいのかも分からなかつた。ただ、今は美森と当たり前の日常を失つたことで心の中に大きな穴が空いてしまつたようだつた。

「こんなちは、美森ちゃんのお兄さん？」

「 -！」

声をかけられて光流は歩みを止める。そこには昨日、美森と一緒にいた小柄な少年がいた。彼はコンクリートの塀に寄り掛かり、光流を見つめている。

その時、光流の心に激しい怒りが沸き起つた。こいつが・・・美森と会つてからすべてがおかしくなりだした。こいつと美森が会わなければ、自分が美森の笑顔を奪うなんてこと、まずあり得なかつたのに。あんな別れかたをせずに済んだのに。

「昨日はどうも。美森ちゃん、元気なさそうだつたから、遊びに誘つたんだ。でも分かれる頃には元気になつていてくれたみたいでよかつたよ。・・・あれ？どうしたの？お兄さん」

その瞬間、光流は彼の襟元を掴み、コンクリートの壁に押し付けた。

「ふざけんなよっ！！！お前が美森をたぶらかさなければこんな事にはならなかつたんだよっ！！！」

・・・そう、すべてこいつが悪いんだ。美森の笑顔を奪つてしまつたのもその苦しみに気付けなかつたのも、すべてこいつが原因ではないか。

光流はさりに彼の襟元をきつく締め、堅い壁に押し付ける。心の

中は今までにない怒りと殺してしまいたいくらいの殺意で満ちていた。

そして光流は「ぶしを高く振り上げる。その瞬間、大きく目を見開いた。

「…彼は笑っていた。

「やはり俺が目をつけていただけあるな」

彼は口元をつりあげ、そう言つと、自分の襟元を掴んでいた光流の手首を力強く握る。

「…！」

光流は思わず激痛に彼から手を離した。

その瞬間、彼は光流の襟元を掴み、乱暴に引き寄せた。そしてみるとうちに彼の黒髪は真っ赤に染まり、その背丈までもが光流よりも大きく太柄な男性のものになつた。そして地についていた光流の足は、宙に浮く。

光流は自分の目を疑つた。彼 アフューカスは人間ではない、そう感じた。

「離せつ…！」

光流はアフューカスの体を思いきり蹴り飛ばす。それと同時にその手から解放された。

「くつく…お前のその醜い心。最高だよ」

アフューカスはさらに口元をつり上げ、光流を見下ろす。

一方、光流は彼の真っ赤な瞳を憎しみのこもつた瞳で睨みつけた。

「…お前、何者だ」

「そのうち分かるさ」

アフューカスは軽く流すように言つ。

「美森とはどんな関係だ？」

するとアフューカスは軽く笑い声を洩らす。

「光流、彼女はお前を手に入れるための口マ、だよ」

「…？」

「もちろん、彼女には感謝している。彼女じゃなくちゃ、お前のそ

の心は育たなかつた

光流は意味を理解する事ができなかつた。美森が「ママ？心？いつ
たいこいつは何の事を言つてゐるんだ。

「光流、俺と一緒に來い

「！？・・・は？行くわけねーだろ？」

どこに行くかは知らないが、光流はこの男とは何処にも行くはず
がなかつた。

「お前が帰るはずの場所はない・・そうだろ？」

アフューカスは光流の目をじつと見つめる。

「お前は大切なものを傷つけ、失つた。それでもこの世界に残るの
か？」

「・・・・・」

光流は言葉を返すことができなかつた。自分は失つてしまつたの
だ。当たり前にそこにいるはずだつた家族を。美森を。

・・・光を。

「残るか？」

アフューカスは光流に問いかけた。その声はどこか確信を持つて
いるように聞こえた。

「・・・・・」

光流は唇を強くかみ締めた。今、「残る」と言えない自分がここ
にいる。

「もう決まつてゐるようだな」

アフューカスはそう言つと、両腕を光流の肩に乗せる。

「光流。俺の目を見るんだ」

「・・・・・」

光流は黙つたままうつむいた。

「ここに残りたくないんだろ？」

光流はもうこの世界が嫌になつた。もう自分を本当に必要として
くれる人は何処にもいない。それなら、今自分がここにいる意味が
あるのだろうか。

光流はゆっくりと顔を上げた。そして炎のような瞳と田があつ。

・・・時間が止まつたように感じた。

光流は彼の瞳から、田をそらす事ができなくなつていた。そして次の瞬間、光流はその場に崩れるように倒れこんだ。

アフューカスの勝ち誇つたような笑みが見えた・・・ような気がした。

「ライト」

突然の言葉に光流は田を覚ました。

「起きたか、ライト」

「・・・？」

光流は、わけが分からず寝かされていたベッドから体を起こした。ベッド以外に唯一、この部屋にあつた前の椅子で、アフューカスが腰を下ろして光流のことを見据えている。

「ずいぶん落ち着いたみたいだな」

「・・・ライトって俺の事か？」

光流はアフューカスを睨みつけながらそう言つた。

「ああ。そうだ。今からお前は“ライト”だ。地上にいた時の名はもう必要ない。今、ここは“魔界”だからな」

光流は自分の耳を疑つた。魔界というものが本当にあるなんて信じられない。窓の外を見ると、一面が闇に染まつており、その中に小さい月が浮かんでいるのが見えた。その青白い光は、ここが今までいた世界とまったく別のところである事を証明しているようだ。

「どうだ？いい場所だろ？魔界は」

「・・・・・」

「まあそのうちお前も、この闇が心地よく感じるや」

「・・・なんで俺をここに連れてきた？」

「俺がお前を“一人目”として選んだんだよ。“魔界の住人”としてのな」

「・・・」

「お前の持っていた、憎しみと怒りの心の闇が俺を引き付けた。・・・

俺が手をかけてそれを引き出してやったがな」

その時、光流の心に再び怒りがわきおこってきた。

「・・・。俺を手に入れるために美森に近づいたのか！？」

「・・・」

その時、アフューカスがゆっくりと立ち上がった。光流は恐怖を感じたが、その場から動かず、じっとアフューカスを見据えた。その瞬間、上から頭を力強くつかまれた。

「その感情はいいが・・ここにまで来て地上へ未練があるか。それならいつそすべて忘れるか？その方が楽だろう」

その言葉に光流は凍りつく。この男は、光流からすべてを奪うことができるんだ。

今まで歩んできた軌跡を。

家族を。

・・・・美森を。

「やめて・・・くれ」

光流の口からは弱々しい言葉しか出てこなかつた。

アフューカスは鼻で軽く笑うと、人差し指で顎を押し上げた。されるがままにアフューカスの顔を見上げると、彼は得意そうに微笑んだ。

「いいか？お前はここに来た時から“魔界の住人”だ。地上の事は忘れる。そして“光流”ではなく、“ライト”だ。分かったな？」

アフューカスは光流に向かつて、言い聞かせるように言った。

光流は、彼の炎のような瞳からの圧力に勝てるはずもなかつた。この男には逆らえない、そう感じた。

「・・・はい・・・」

光流は弱々しくそう答えるしかなかつた。

アフューカスは満足そうな笑みを浮かべると、光流から視線を外した。そして、背を向けて部屋の隅にあるドアに向かつて歩き出し

た。

「・・・一つだけお願ひがあります」

アフューカスは動きを止め、肩越しにじけうを見る。

「もう一度だけ美森に会わせてください」

光流はできるだけ力強く、そう言つた。

アフューカスはしばらくの沈黙の後、静かに口を開いた。

「いいだろう。ただし条件がある・・俺の変わりに魔界の住人を100人集めろ」

「・・・！」

「俺がやつてもいいんだが、何しろ俺はここの中だしな。いろいろと忙しいんだよ」

「・・・・」

「そうすれば、美森とに会わせてやるよ」

そう言つと、アフューカスは奇妙な笑みを浮かべて光流の前から姿を消した。

それから十年以上の時がたつ。

しかし、ライトは何も変わつていない。背の高さも。髪の長さも。魔界に来てから、ライトの時は止まつたままだ。

・・地上にいる美森はどうしているだろうか。きっと奇麗な大人の女性になつていてるに違いない。

そして、もしかしたら、自分のことはもう忘れてしまつたかもしれない。

「ライト」

突然アフューカスに声をかけられ、ライトはハツと我に返った。

「あと一人だそうだな」

「あ・・ああ」

「気を抜くなよ」

すると、アフューカスはライトの隣から腰を上げた。そして再びライトに視線を送ると、力強く言つた。

「いいか。決してあの事は他の住人には言うなよ。面倒くさい事になるからな」

「分かってます」

ライトは静かにそう答えた。

そしてアフューカスは満足そうな笑みを浮かべ、部屋から出て行つた。

ライトは、アフューカスの足音が聞こえなくなるのを確認すると、ベッドに横になった。

（そう。あの事は決して他の住人には言つてはいけない。自分自身のためにも。他の住人のためにも。言つてしまえば、きっと自分のようすに辛い思いをするだけだ）

ライトは時々思う。自分も他の住人のように、記憶が無ければどんなにいいかと。そうすれば地上に戻りたい気持ちも起こらない。光を再び求めることもない。そうなればライトも、他の住人の様に完全に闇に染まることができるだろう。

・・でも、美森に会えなくなるのは嫌だつた。もう一度でいいから会つて、あの時のことを謝りたかった。そして再び笑顔が見たかった。

他の住人は、ライトが地上から連れてきた人物だ。その住人たちが、再び地上に戻りたいと思わないのもライトのお陰だ。

ライトは記憶を奪つてきた。人の歩んできた軌跡を消してきた。その方が都合が良かつたからだ。ライトにとつても、この魔界にとつても。

ライトのような人物が魔界に溢れてしまつたら、魔界は大混乱に陥るだろう。それにライトのような思いをするのは、自分一人で十分だ。

だから、記憶を奪つた事は決して言つてはならない。

葵はいつものように田を覚ました。

今日は月曜日。またこれから同じような一週間が始まるのだ。

葵は憂鬱な気分に浸りながら、ベッドから体を起こした。そして、朝食をとるために、一階へ降りていった。

「おはよう。葵ちゃん」

玄関を出ると、そこには爽やかな笑みを浮かべて立っている世紀の姿があつた。

「おはよ・・・」

葵は世紀がいたことに驚いたが、一応それに返事をする。

「私、ここに近くに住んでるの。だから、今日、一緒に行つてもいいかな」

「あつ・・・はい」

すると世紀は口元で手を握り、くすりと笑つ。

「・・・敬語じゃなくて、タメ語でいいのに」

「・・・うん」

葵は、ためらいがちにそう答えた。そして一人は、駅に向かつて歩き出した。

「良かつた・・・少し落ち着いたみたいだね」
いつものように満員電車からやつとの思いで抜け出すと、世紀が
静かに話しかけてきた。

「・・・え？ 何が？」

「だつて、この前あつた時はものすごく怖い顔してたから。でも今は、少し優しい感じがする」

「・・・」

葵は、自分ではほとんど自覚がなかつた。気づかない感情までも
が、顔に出てしまつてゐるらしい。葵せりのアライテの言つた事を思つて出
した。

（私つて顔に出やすいタイプなんだ）

「ね。葵ちゃん。うちの道から行こう。うちのまうが少し早く
着くの」

駅から少し歩くと、世紀は立ち止つ、路地裏を指差す。

「うん。こいよ」

その道は、日光が当たらないせいか、他の場所よりすす暗い。し
かし葵は気にすることなく、世紀の後に続々歩を出した。

「あと少し、だよ」

少し歩くと、世紀はそう言つた。

「・・・うん」

と、その時、誰かに肩をトントンと叩かれた。驚いて振り返ると、
そこには中学生くらいの女の子が立つていて。いや、正確に言つて
ただの女の子ではなかつた。ショートカットの髪から、猫のよつ

な耳が飛び出していて、田もまた猫のような鋭く尖った瞳をしている。

「「んばんはあ……」

その少女は、その瞳をゆがまして葵に笑いかけた。

葵は一步、後づさる。彼女は明らかに“「」”の人間ではない。

「えーなに？ ジューリーの事怖いの？ 葵おねーちゃん！？」

その少女 ジューリーは葵に顔をぐいっと近づけると、不機嫌な顔をしてそう言った。

「・つ・・・・・」

「んじゃ、ジューリーもお姉ちゃんの事怖い。耳とぶがつてねう～ ジューリーは葵から一步後退ると、わざとうしょくをうづつ。

（・・ウザッ）

葵は少しだけ恐怖を覚えたが、今は「」の少女—ジューリーをいつのらく感じる気持ちのほうが、明らかに大きくなっていた。

まだジューリーはわざとらしい表情で、葵の事を見ている。

「どうしたの！？ 葵ちゃん！」

葵がいないことに気付いた世紀が、慌てた様子で戻ってきた。世紀は葵の顔を見て落ち着いた表情を見せるが、葵のすぐ隣にいたジューリーを凝視した。その顔には、驚きと焦りが入り混じっている。

「へえ、お姉ちゃん以外にも見える人がいるなんて珍しいねえ」 ジューリーは表情をぐるりと変えると、目を丸くして世紀の方を見た。

「葵ちゃんは下がつてて」

世紀はそう言つと、葵を隠すようにして前に立つた。その手には、あの十字架の形をしたキーホルダーのような物が握りしめられている。

「そんなに警戒しなくていいのにーーー、ジューリー何も悪こことしないよ？」

「・・・・・」

世紀はジョーニーの言葉を聞き流すと、手に持つていたキー・ホルダーケーを、自分の前に突き出すようにして持つ。

そしてそれが光に包まれたかと思うと、『』のような形に変化した。「あなたのような“完全な魔界の住人”には消えてもう必要があります。そうすれば、あなたを闇から解放することができるでしょう」

世紀は驚くほど落ち着いた口調で言った。

「何についてるの～？ ジョーニー意味分かんない～」

「・・・・・」

そして世紀は手に持っていた『』を引いた。

するとジョーニーが思い出したかのように、手のひらを「ふし」でポンッと叩いた。

「あー！ もしかしてあなた“カリウド”？ ライトが、地上にはそんな人達がいるから氣をつけろって言つてたよ～！」

葵は“ライト”という言葉に少しドキリとした。どうやらジョーニーはライトの知り合いらしい。

「・・・すぐ闇から開放してあげるから」

世紀は力強い声でそう言つと、掴んでいた矢を放した。そしてそれとほぼ同時に、ジョーニーは隣にあつた壙にピョンッと飛び乗つた。その瞬間、ジョーニーがさつきまで立つていた後ろの壙に、矢が勢い良く突き刺さる。

「危ないな。カリウドのお姉ちゃんは、葵お姉ちゃんはそんな事しないのに～！」

ジョーニーは壙の上から世紀を見下ろすと、イーツと歯を見せた。

葵はそんなジョーニーの顔を見て浅くため息をついた。

（早くしないと学校遅れちゃうじやん）

「世紀さん」

葵は世紀に控え目に声をかけた。しかし世紀は、ジョーニーを睨み付けているだけで、葵の言葉に気づく様子がない。

（・・・はー・・・・）

とその時、誰かの手が葵の口を押さえつけた。

「……」

そして、世紀達には見えない、塙で隠れた場所に引きずり込まれた。

「「じめんね。びっくりさせかけやった?」

葵の背後から聞こえてくる楽しさに似たような声は、ライトのものだった。

ライトだと分かつて安心したが、口を押さえられているので声を出すことができない。葵は無理やりそのまま手を口から引き剥がした。そしてライトと向かい合つて、できるだけ落ち着いた口調で言った。

「何しに來たの?」

「……」

「……」

「ジーラーが邪魔しちゃつて悪かつたね。子供っぽいところがある

からさ」

ライトはそう言つと、こつものよつて微笑んだ。

「……ライトは私を魔界に連れて行こうとしている……」

葵はライトの目を力強く見据えてそう言つた。ライトの笑顔が少しだけ引きついたように見えた。

「そして私を、その住人にしようとしている……でしょ?」

「……うん。そうだよ」

ライトは軽くため息をつきながら、微笑んで言つた。

「……何で……私を連れていく必要があるの?」

「葵がこの世界にくだらなさを感じていて、理由はそれだけだよ。その耳も僕が何かをやつたわけじゃない……葵の気持ちがそうさせたんだ」

「……」

「それとも魔界に行きたくない理由でもあるの?」

「……それは……」

葵は言葉に詰まってしまった。自分が“ここ”にいる理由を見つ

ける事ができなかつた。

すると、ライトが葵の行き詰つた顔を見て「「口」」と微笑んだ。

「それなら・・・」

「あれえ～？ライト来てたの？」

突然、後ろの塀からジエニミが顔を出した。

「ジエニミ」

ライトは困つたようにジエニミに笑いかける。

「なんだあ～！来てたなら声かけてくれれば良かつたのに！」

そう言つと、ジエニミはライトに駆け寄りライトの腕にしがみついた。

「・・・ジエニミは何の用でここに来たの？」

「ん～。ジエニミは葵つて人がどんな人なのか見にきた！ライトがあつちで、ギインとその人について話してゐるの聞こえたから～～」

「・・・・

「・・・案外フツーの人だね！ものすごく可愛い人だつたらビーよーかと思つちゃた！」

そう言つとジエニミは、葵の方を見てニヤーと笑つた。

（ウザインですけど・・・）

そして葵は、踵を変えて歩き出した。すると、世紀が地面上に横たわつてゐるのが目に入る。

「世紀さん！？」

葵はそう言つと、世紀に駆け寄つて体を抱きかかえた。よく見ると、彼女の膝から血が流れ出していた。

「大丈夫？」

葵は世紀の怪我が思つていた以上に軽かつたので、少し安心して声をかけた。

「うん。大丈夫。斬られたときには驚いて倒れただけだから」

世紀は微笑みながらそう言つと、ゆっくりと立ち上がりつた。しかし、すぐまたその場にしゃがみ込んでしまつた。

「・・・あれ？」

世紀は自分でも、何がなんだか分からぬ様子だ。

「残念でしたあ～。ジエニミの爪には毒があるんですね～！」

驚いて振り返ると、そこにはジエニミとライトの姿があった。

ジエニミは、自分の猫のように尖った爪を見せ付けてニヤニヤ笑つている。

その隣でライトは、困ったように一人に笑いかけた。

「しばらくは動けないと思つよ～！」

「・・・・」

世紀はジエニミの顔をじっと睨み付けると、俯いた。

「どうしたの？カリウドさん。そんなんじゃ、僕達を消す事はできないよ」

ライトは馬鹿にしたような笑みを浮かべると、世紀の方に歩み寄つた。

世紀は必死に体を動かそうとしているが、ジエニミの毒が回つているせいで動けないようだ。

するとライトは、しゃがみ込んでいる世紀に向かつて手をかざした。そしてその手を上に持ち上げた。それと同時に世紀の体も空中に浮いた。まるで見えない何かに持ち上げられているようだ。

「・・・・・」

「・・僕達にとつて君らは、邪魔者以外の何者でもないんだよね」
ライトはそう言つと、世紀に向かつて微笑みかけた。

「そう～そう～邪魔あ～！何かうるさいし！」

その隣でジエニミが腕を組んでののしる。

ライトは軽く息をつくと、もう一方の手を世紀に伸ばした。

その時、葵に寒気がはしつた。このままではヤバイ、そう直感的に感じた。そして気づくと、ライトの腕を掴み、押さえつけていた。

「・・・・・」

ライトは、驚きの入り混じった表情で葵を見る。それと同時に世紀の体が地面に落ちた。

葵は、押さえつけていた手をすばやく引っ込めた。そして唇くちびるに言った。

「・・・やりすぎだ思う・・・」

「ちょっとー！邪魔しないでよー。葵お姉ちゃん！」

葵はその言葉を無視して、ライトの表情をじつそりと窺つた。

ライトは笑っていた。

だが、その目は笑っていない。作り物のよつなどても冷たい目だ。葵はその瞳を見てぞっとした。こんなライトを見るのは初めてのような気がする。

「・・・葵にとつてこの人は、大切な人なの？」

ライトはいつものように、その顔に親しみやすい笑みを浮かべる。

「・・・・・」

葵は、世紀が少し戸惑っているのが感じられた。しかし、すぐに答える事ができなかつた。葵にとつて世紀は大切だ。しかし、それを口にするほどの自身が葵にはなかつた。たとえ口にしたとしても、その言葉がものすごく軽く、意味のない物になつてしまつような気がした。

するとライトは静かに口を開く。

「・・・葵にとつてこの人はただの他人。それなのに、なんでこんなに必死になれるの？」

そしてしばらくの沈黙のあと、葵は呟くように答えた。

「たしかに、私と世紀さんは他人かもしけない。・・でも“友達”だよ・・」

そう言い切ると、葵は自分の言葉に恥ずかしさを覚えて顔を伏せた。自分がこんなことを言うなんて信じられない。ライトから返つてくるのは嫌なほどの沈黙だけだ。

そして、葵は再び顔を上げると、ライトの目をじつかりと見据えて言つた。

「それと・・私、魔界には行かないから」

「・・・・・」

「たしかに今の私にはここに残る理由が無いかも知れないけど、それはこれから見つけていけばいいと思う……し」

「……そつか」

ライトは唇くちづきに言つと、かすかに微笑んだ。
しかしその笑顔は、さつきのとはまるで違つた、どこか悲しげな、
そして寂しげな笑顔だった。そして葵に背を向けると、スタスターと
歩き出す。

「ちよつと……ライト……！」

その後をジヒーミが小走りでついて行く。そして二人は溶けるよ
うにして姿を消した。

葵はしばらく二人の消えた場所を見つめていた。ライトの最後に
見せた笑顔が、頭から離れない。その笑顔が本当のライトを隠して
いるように見えて仕方がなかつた。

「葵ちゃん」

振り向くと、そこには静かに立つてゐる世紀の姿があつた。どう
やら、体の毒はもう抜けたらしい。

「ありがとう」

「……うん」

すると何かに気づいたかのよつて、世紀が目を見開いた。

「葵ちゃんつその耳……」

葵は反射的に、すばやく手を耳に押し当てる。そして、驚きのあ
まり息を呑んだ。そこには普通の耳があつた。形も元のよつに丸く
なり、大きさも元のよつに戻つてゐる。

「……」

「良かつた。きっと葵ちゃんの心の闇が消えつゝあるんだね」

「世紀はうれしそうに葵に笑いかけた。

「……うん」

葵も、笑みを返しながら言つた。しかし、葵はライトのことが気
になつて仕方がなかつた。・・・あの笑顔の奥には、いつたいなに
があるのである。

「葵ちゃんー学校遅刻しちやうよ」

気がつくと、世紀が少し先で葵のことを手招きしている。

「うん」

葵は小走りで世紀の所へ向かった。

「んだよーーライトーー！」

ギインは怒ったように手を振りつと、サッカーボールを乱暴にライトに蹴り飛ばした。

「なんでギインが怒ってるんだよ」

ライトはそう言いながら、片足でボールを受け止めた。

「・・葵をあきらめたって本気で言つてんのか！？最後の一人だつたのに！！」

「・・・サッカーしに公園まで来たのに、何でそんな話してるの？」

そう言つと、ライトは強めにボールをギインに蹴り返した。するとそのボールは、ギインの横を通り過ぎて後ろの茂みに入ってしまった。

「あーーーびー蹴つてんだよーー！」

ギインはそう言いながらも、ボールを追つて茂みに入つていく。ライトはそんなギインの後姿を見送ると、浅くため息をついた。たしかに葵を手放すのは少し気が引けた。しかし今の葵は、もうライトの求めている葵ではなくなつてしまつた。ここに連れてくる事ができる人間は、心に深い闇を持つた人間だ。しかし、あのカリウドをかばつた葵を見る限り、もつ葵はここに連れて来る事ができない。

葵は光を見つけてしまった。光流には見つけられなかつた物を見つけてしまつたのだ。

「いり～！だめでしょ。ライト！」

突然、茂みの中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。そして、その中からサッカーボールがポンッと飛び出し、それは丁度ライトの足元で動きを止めた。

「アルシス、いたんだ」

ライトが声をかけると、その茂みの中から一人の女性が姿を現した。

年齢はライトと同じくらいで、キラキラと光る銀色の髪を横でひとつに束ねている。そして彼女の手には、スケッチブックらしき物が握られていた。

「あんなボール蹴っちゃギンには取れないでしょーまだ小さいんだから！」

「俺は小さくねえ！」

アルシスの後ろから姿を現したギンが、怒鳴るようにして言った。そしてギンはアルシスを追い抜き、ライトの隣まで来ると、体をライトにぶつけながら叫び。

「俺、小さくねーよな！？ライト！」

「・・・小さいと思うけど」

「ほら～！ライトだつてそう叫びてるじゃん」

アルシスは口元に手を当てるとい、クスクスと笑い出した。

「うるせー！？」

ギンはほのかに顔を赤らめながらそう叫ぶ。

「で、アルシスはあんな所で何してたの？」

ギンの言葉を軽く聞き流すと、ライトはアルシスに問いかけた。「ん～。ちょっとね。植物をスケッチしてたんだ。ほら、ここにあら植物といつたら公園にある人工的なものしかないでしょ？」
「・・そっか」

「図鑑に載つてるような、いろいろな花や植物スケッチしてみたい

「んだけどな〜」

そう言つと、アルシスは困つたような笑みを浮かべた。
ライトはその笑顔を見てビドキリとした。なぜか、アルシスの笑
みが美森の笑みと重なつて見えたのだ。

「・・・・・」

ライトは突然2人に背を向けて、早足で歩き出した。

「えつー!? ライト?」

「ライトー! サッカー もうやんねーのか! ?」

しかし、ライトは一人の言葉にも歩みを止めずに歩き続ける。今はただ、美森に会いたくてたまらなかつた。

「いつもライトはあーなんだよ」

ギインはライトの姿が見えなくなると、ため息混じりに言つた。

「何考えてんだか俺には全然わからんねー」

「・・・・ そうなんだ」

アルシスは呟くようにそれに答えた。

「まあ、ギインはまだおこちや まだから分からぬのかもね?」

そう言つとアルシスは、からかう様な笑みを浮かべた。

「何だとー! この白髪頭ー! 」

「言つたなー! けつこうこの色氣に入つてゐるのになー! 」

「ずいぶんと楽しそうだな」

「!!」

突然、低い男の声が二人の背後から聞こえた。

驚いて振り返ると、そこには腕を組んで悠然と立つてゐるアフューカスの姿があつた。

葵はテレビの前に座っていた。しかし、テレビを見ているわけではない。ただそこにあるテーブルに座つて、バリバリとせんべいを食べているだけだ。

テレビでは漫才がやっているらしく、隣に座つている清音が、それを見てグラグラと笑つてゐる。

葵はせんべいを全部口に入れると、一階の皿庫へ行くために立ち上がつた。

「あれ？ あおちゃん、もう寝るの？」

清音はテレビから視線を外すと、葵を見上げて言った。

「うん。 おやすみ。 お姉ちゃん」

葵はそれにそつけなく答えると、茶の間を後にした。

後ろで清音が、「おやすみ」と返してゐるのが聞こえた。

葵は自室に入ると、ベッドにしつづ伏せに倒れこんだ。

まだ眠くは無かった。ただ暇だつた。テレビを見てもつまらない。だからとこつて勉強する氣にもなれなかつた。

しばらぐベッドの上でゴロゴロすると、葵は何となく外の景色が見たくなつて窓を開けた。

そこにはたくさん星が瞬いていた。葵は久しぶりに、こんなにたくさんの星を見たような気がした。

「はー・・・

葵は外の空氣を吸い込むと、ゆっくりと息を出した。

(奇麗・・だなあ・・)

そしてその闇は、葵の汚れた部分をそつと隠してくれて、いつの間に感じた。

そしてライトの事をふと思に出した。じぱりへ念つてないような気がする。

(・・今じり、何してんだろ?)

もしかしたら、いつも笑つているライトでも今この瞬間は笑つていなかのかもしない。でも、ライトが最後に見せたような悲しい顔で笑つているよりは笑つていいほうがいい、葵はそう思つた。笑顔を無理に作るのはきつと辛いだろうから。

(多分ね)

葵は再び夜空を見上げると、窓を閉めるため手を伸ばした。

「よつ！…葵、久しぶり…！」

突然、聞き覚えのある声が葵の頭上から降つてきた。

驚いて顔を窓から出し、見上げてみると、そこには懐かしいギンの姿があった。今日は普通の子供の大きさだ。

そしてギインの隣には見覚えのない、女性の姿があつた。年齢は、葵と同じくらいか少し上くらいだ。

そして彼女の髪は、夜の闇を背景にして明るく銀色に輝いており、とても奇麗だ。

「こんばんは。葵ちゃん！」

その女性はそう言つと、葵に笑いかけた。

「あつ…。こんばんは」

葵は、聞こえるか分らない位控え目に、返事をする。

「私の名前は、アルシスっていうんだ」

「・・・・・」

葵は何が何だか分からず、アルシスをじつと見つめた。いつたいこの一人は何をしにここに来たのだろう。そして葵は、ここにライトがない事が気になつて仕方がなかつた。ギインがいるのにライトがないとは何だか変な感じだ。

「あの…」

葵は思い切つて口を開いた。

そして次の瞬間、驚きのあまり目を見開いた。そこには誰もいな

かつた。ただ何もない夜空が広がっているだけだ。

まるで瞬きをした瞬間に一人が消えてしまったように感じた。
(確かにさつきまでここにいたのに・・・もしかして田の錯覚・・・?)

葵はもう一度いない事を確認すると、窓をゆっくりと閉めた。

?

「まだ葵には俺たちの事が見えてる・・・」

ギインは屋根の上に腰を下ろすと、隣に座っているアルシスに弾んだ声で言った。

「だね！話を聞いたら、もう見えなくなっていてもおかしくない思つたんだけど」

「さつそくアフューカスさんの所へ報告しに行くか〜！」

ギインは立ち上がると、首を「キキキキと鳴らしながら言った。

「あつ。ちょっと待つて！」

そう言つとアルシスは、スケッチブックを取り出した。

「ちょっとここでいろいろな物スケッチしていきたいなーって思つてたんだけど」

「え〜〜ここまで来てまた絵描くのかよ〜めんどくせーなあ

「・・・お子様だからこの楽しみが分からぬのかもね〜」

アルシスは、そう言いながらニヤツと笑つた。そしてフワツと浮き上がると、ギインを見下ろして言った。

「できるだけ早く終われるように努力するから〜〜！」

アルシスはそういう残すと、夜の闇に消えていった。

葵は窓から差し込んでくる光で目が覚めた。

もう太陽は高い位置にあるらしい。

(寝すぎちゃった)

しかし今日は日曜日だ。だから問題はない。

葵はベッドから体を起こす。そして昨夜の事が脳裏に浮かんだ。ただの夢だったのかもしれない。葵はそう思った。

そしてのろのろと一階へ降りると、顔を洗い、何か食べ物がないか冷蔵庫を開けた。

そしてその時、誰かに肩をとんとんと叩かれた。

葵は反射的に振り返り、そしてそこに待ち受けていた人差し指が見事に葵の頬にめり込んだ。

「・・お姉ちゃん・・なにやつてんの?」

そこには、からかいつに笑っている清音の姿があった。

「引っかかったあ~」

清音はうれしそうに笑いつつ、「おはよ。おおひやん」と付け加えた。

「おはよう」

葵はそつけなくそれに答えると、冷蔵庫からヨーグルトを取り出して、台所の椅子に腰を下ろした。続いて清音もその隣に腰を下ろす。

「ね? あおひやん。歌に興味ない?」

清音が突然葵に問いかけた。

「・・・は・・・・・」

「今日、私が入ってるサークルの卒業した先輩達が演奏会を開くのね。もし良かつたら、一緒に行かない? ちょ一綺麗で感動するんだから!」

「・・・・・」

葵は歌が嫌いというわけではなかった。むしろ音楽を聞いたり、詩を読むことが好きなほうだ。

「うん。いいよ」

清音はその言葉を聞くと、うれしそうに微笑んだ。

その会場は葵が思っていたより、大きくなかった。といつかそこは、時々映画を見に行く市民会館だ。

その入り口付近には『×合唱演奏会』という看板が立てかけてある。

（合唱か・・）

葵はその看板を見送ると、清音の後に続き会場に入った。

葵は始まつた合唱に静かに耳を傾ける。歌声が会場全体に響き渡り、まるで人が歌つているように思えなつた。
しばらくすると、一人の女性がステージに残つて会場に向かって頭を下げる。

どうやらこれから独奏に入るらしい。

すると、その女性が歌いだした。葵はその歌声に耳をます。一つの歌声が会場を包み込んだ。その声はしつかりとしていて、どこにも迷いがないような、そんな声だつた。

葵はそんな彼女が、とてもすごい人だと感じた。彼女はとても楽しそうに、微笑みながら歌つている。

しかし葵は、彼女の笑顔を見てドキリとした。とても悲しそうだ。

そしてその笑顔が、ライトのあの笑顔と重なつた。

(「この人も無理して笑ってる・・・？」)

「綺麗でしょ？あおちゃん」

隣に座っていた清音が、わざやくよつて言つた。

「・・・うん」

葵は彼女から田を離さずに、それだけ答えた。

「私、今日歌つた先輩たちに挨拶しに行くんだけど、あおちゃんも来る？」

会場を出ると、清音が葵に問いかけた。

葵は一瞬迷つたが、何となく行つてみたくなつた。あの笑顔で歌つた人に会つてみたくなつたのだ。

「・・・うん」

葵は控えめにそう言つた。

清音はその言葉を聞くと、驚いたように葵を見た。びしやら、来るとは予想していなかつたらしい。

しかしすぐに笑顔に戻つて、「んじゃ、いこーかー」と言つと、葵の腕を引っ張つて歩き出した。

「日菜野先輩！！」

清音は元気にそう言つと、一人の女性の所へ駆け寄つて行つた。

「清音ちゃん。久しぶりだね」

その女性は手を振つて清音を迎えた。そして一人は楽しそうに話し出した。

葵は一人の様子を、少し離れた所から見ていた。清音と楽しそう

におしゃべりをしている女性は、あの独奏をした人に間違いかつた。

とても楽しそうに笑っている。

そしてふと葵と田が合つた。すると清音と言葉を交わし、葵を手招きした。

葵は少し戸惑いながらも、一人の所へ歩いていった。

「この子が私の妹で、葵つていうんですよ」

清音は二口二口しながら、葵の肩に手を乗せると言つた。

「葵ちゃんつていうんだ。清音ちゃんと似て可愛いね」

彼女は一人の顔を見比べながら楽しそうに言つ。

葵は顔が熱くなるのを感じた。“可愛い”と言われたのは、ライトの時を含めて二回田だ。

「あつ。あおちゃん、照れてる~！」

清音はからかうように言つと、指で葵の頬をついた。

「葵ちゃん、私、日菜野美森つていうんだ。私の歌、聴いてくれてありがとうね」

「・・・いえ・・・」

そして葵は美森にチラッと視線を向けた。田が合つと、美森は優しく微笑みかけてくれた。

やつぱりその笑顔はライトの笑顔と重なつた。だから美森はライトに似ている、そう感じずにはいられなかつた。

「ライトって人知つてますか？」

「え？」

葵はその時、しまつたと思つた。ついつい思つていた事を口にしてしまつた。

「なつ・・・何でもないです・・・

「・・・そう？」

美森がライトに似ているからといって、知つているはずがない。

ただ歌つているときに見せた、悲しそうな笑顔だけはライトのあの笑顔とそっくりだつた。

「あー、じゃあ、先輩、そろそろ失礼します」

「うん。気をつけて帰つてね。清音ちゃん、葵ひやん」

美森が手を振ると、清音は軽くお辞儀をして美森に背を向けて歩き出した。

葵も清音の後に続き、歩き出す。

振り返るとそこには、笑顔で手を振つて見送つている美森の姿があつた。

葵は美森に頭を下げるとい、再び前を向いて歩き出した。

ライトは灰色の空間にいた。壁も机も椅子もすべてが灰色だ。そしてどこかライトの部屋に似ているような気もした。

「わざわざあなたの部屋に呼び出すなんて、俺に何かようですか？」
ライトは目の前に足を組んで座つて、アフューカスに静かに言った。

「もう分かつているはずだが？・・・ライト？」

アフューカスはライトをしつかりと見据えて重たい口調で言った。

「まあ座れ」

「・・・・・」

ライトは何も言わずに、その場にあつた椅子に腰を下ろした。

「最後の一人はどうした？・・・そろそろこちらに連れてきてもいいはずだが？」

「・・もう今の人間は諦めました。・・別の人間を探します」

ライトはアフューカスと目を合わせないようにして、できるだけ落ち着いた口調で言った。

「・・・・」

「それなので、もう少し時間はかかると思います・・・」

そしてしばらくの沈黙の後、アフューカスが静かに口を開いた。

「それは駄目だな。今の人間でいけ」

「！」

「俺をいつまでも待たせるな

「・・・・」

「まだその人間の心の闇は完全に消えたわけではない。今のうちにさっさとこちらに連れてこい」

ライトは黙つて俯いた。何も言い返せない自分に腹が立つた。

「お前も美森という奴に早く会いたいんだろう？」

「・・・・」

そしてアフューカスが立ち上がった気配がした。そしてライトの前まで来ると歩みを止めた。

すると突然、下から顎を強く掴まれた。そして無理やり上を向かされた。

次の瞬間、炎のような瞳と皿が合つた。

「いいか？早くその人間を連れて来い。今までのよつに記憶を消しちまえば簡単なはずだ・・・分かったか？」

「・・・・はい」

ライトはそうとしか答えることができなかつた。

・・・どうしてもこの瞳には逆らうことができないのだ。

葵はふと窓に目を向けた。

そこには夜の闇に混じつて、星々が小さな光を出して輝いていた。

田の前にある机には教科書とノートが広げてあるが、握っているシャーペンは止まつたままだ。

葵は昼間聞いた、美森の演奏を思い出した。あの綺麗で、そしてどこか寂しげな歌声が頭から離れない。

そしてふと、窓から視線を外した。窓ガラスに人影が見えたような気がしたからだ。

振り返るとそこにはライトがいた。ただ静かに葵の事を見下ろしている。

「・・・ライト？」

「・・・良かつた。まだ僕の事見えるんだね」

そう言つと、ライトはいつものように微笑んだ。まるでそれが当たり前のようだ。

「・・・何で笑ってるの？・・・そんなに幸せなの？・・・私はライトのようにいつも笑つていられない。別に幸せな事や楽しい事があるつてわけじゃないのに笑う必要なんてないでしょ？」

葵は唇を噛み締めた。もしかしたら今の言葉はライトを傷つけてしまつたかもしれない。

「ごめんね。でも僕は笑う事を止められないんだ。どうしてだらうね」

そう静かに言つと、腰をかがめ、葵の目をじつと見つめてきた。そして次の瞬間、その瞳と田が合つた。とても綺麗なブルーグレーノ瞳。

葵は目が離せなくなつていて、ずっと見続けていたい、そう感じた。

そして、意識が遠のいていくような感覚に襲われた。どんどんまぶたが重くなる。

そのまま田を閉じてしまおう、葵はそう思った。

その時、ライトの田が苦しそうに歪んだ。

葵は驚いて目を見開いた。もつそこにライトの瞳はなかつた。ライトはすでに立ち上がりつており、葵に背を向けて立つていて。

「・・・どうしたの？ライト

葵はライトの背中に向かって控えめに呼びかけた。

「いめん・・・。葵」

「・・・え？」

そしてライトの姿がみるみる薄くなり始めた。魔界へ帰ろうとしているのだ。

「待つて」

葵は自分でも驚く位の力強い声でライトを呼び止めていた。ライトの体は元に戻り、驚いたように肩越しに振り返った。

「・・・・・美森さんつていう人を知ってる？」

葵は美森の笑顔を思い浮かべながら言つた。やはりその顔は、ライトの笑顔と重なる。

次の瞬間、ライトは驚きの表情を見せた。しかしそれはすぐに悲しみに歪む。

「・・僕の・・・・な・・・・・」

「え？」

葵はライトが何を言つたのか聞き取ることができなかつた。ただその声が弱々しく震えている事だけは感じ取ることができた。そしてライトは音もなくその場から消えた。

アルシスは魔界の公園のベンチでスケッチブックを広げた。そこには色とりどりの草花、そして人物などが描かれている。そしてそれを隣に座つていたギインが覗き込む。

「へ～。こんなに描いたんだな。アルシス」

ギインはスケッチブックをペラペラとめぐりながら関心した様な声を上げた。

「うん。まあね。もうちょっと描きたかったんだけど、ギインが早くしる～！つてつるさかつたからさ。これだけしか描けなかつたよ」

「つていうが、これだけ描けば十分だろ！？」

「いや、十分じゃないねい～！」

アルシスはニヤニヤと笑いながら楽しそうに言った。

「私はもつと描くつもりだから！」

「・・・あつそ」

そしてふとアルシスは顔を上げた。公園の入り口付近にライトが歩いているのが目に入った。

「ライト！！」

アルシスはそう叫ぶと、「ギイン、行こ」と呟いてライトの方へ駆け寄つた。その後にギインも続く。

「こんな所でビーッしたの？」

「別に・・・」

ライトは弱々しく呟いた。

「んだよ！－ライト、テンション低いぞ！？」

「・・・いつもどおりだよ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

するとアルシスが2人の沈黙を破るかのように口を開いた。

「あ！－！そ、うだ。私、地上でいろいろな物スケッチして来たんだ。

ライトも見て！」

そしてライトの前にスケッチブックを持つてくると、一枚一枚めくる様にして見せた。

それを無表情で見つめていたライトが一枚の絵で目を止めた。

「・・・？何か気になる絵でもあつた？」

それは女性の絵だつた。アルシスがたまたま見に行つた合唱の演奏会で独奏をしていた女性を描いたものだ。

「つー・・・・」

ライトは厳しい表情をすると、一人に背を向けて走り出した。

「ライト！？」

そしてライトの姿が見えなくなると、ギインが静かに口を開いた。

「な？いつもこうなんだよ」

「・・・」

アルシスはライトの消えた先を、じつと見つめることしかできなかつた。

ライトは走るのを止めると、じつとその場に立ち尽くした。

まだ息があらい。そして唇を噛みしめた。

スケッチブックに描かれていた女性ー彼女は間違いなく美森だった。

あの悲しそうに笑っている顔はあの時の人まだった。

（何でそんなに悲しい顔をしているのだろう。何でそれなのに笑っているのだろう）

美森はきっと自分と同じだ。胸の中が寂しい気持ちでいっぱい、それなのに笑っている。

「笑顔」は本当の自分を隠すだけの仮面にすぎないのだ。

（行かないと・・・）

美森に自分が見えないことは分かっていた。“再会”することはできないが、きっと美森を感じることぐらいならできる。

あの時の自分の後悔が消えるわけではない。けれど、何かが変わると信じたかった。

葵が美森を見つけたのは学校帰りのことだ。いつも前を通る公園で、彼女はベンチに腰を下していた。

葵が公園に入つて来ても、美森はそれに気が付く様子もなく空を見上げている。

「美森さん？」

気が付くと葵は美森に声をかけていた。

「葵ちゃん？」

美森は驚いたように葵を見た。

「こんな所で何してるんですか？」

美森はしばらくの沈黙の後、微笑みながら口を開いた。

「・・・ちょっとね。思い出してたんだ。お兄ちゃんの事。昔、一緒に住んでた所に来たら何だか懐かしくなっちゃって」

葵は美森の以外な発言に内心で驚く。

「・・・もう今は一緒に住んでないんですか？」

「・・・うん。両親が別居してからはお兄ちゃんと私はそれぞの両親と一緒に暮らし始めて、それ以来会つてない。・・・もしかしたら、ここに来れば会えるかもって思つたけどやつぱり無理だつたみたい。もつたくさん時間たつちゃつたしね」

「・・・」

「喧嘩したこと、謝りたくて、でも会つのが怖くて、そしたらあつといつ間にこんなに時間がたつちゃつた。ほんとはすぐに会いに行きたかったのに」

美森はそう言つと、葵に笑いかけた。

とても悲しそうに。

とても寂しそうに。

葵は胸がズキリと痛んだ。

彼女は笑つている。悲しいのに笑つてゐるんだ。

(何で笑っているんですか？あなたは幸せなんですか？)

葵はハツとした。さつき抱いた疑問はライトにした質問と同じだ。

(もしかしてライトは・・・)

その時、美森の前に何の前触れもなくライトが姿を現した。

「！――！」

ライトは葵の方を見ると、かすかに微笑んで目の前に座っている美森を優しく見下るした。

そして、いとおしむかの様に言つた。

「・・・ごめんね。あの時、ひどい」と言つて。それに・・会いに行けなくて「ごめん」

「・・・・・」

やはり美森はライトが見えていないらしく、ただ前をじっと見つめているだけだ。

たしかに彼女の瞳は兄のことを思つているはずなのに、目の前にいる兄を見ることができない。

するとライトは、美森をギュッと抱きしめた。

「本当に本当に大きくなつたね。美森。体も心も。そして頑張つたね。寂しかつただろ？ それなのによく頑張つたよ」

そしてライトは再び美森を力強く抱きしめた。

「一度あきらめた合唱にまた挑戦することができるんだから、きっとこれからも頑張れる・・挫折してもそこから立ち上がる勇気が美森にはあるから」

そしてライトは抱きしめていた腕を放すと、美森に微笑みかけた。

「・・・俺はずつと見守つてるよ」

葵はそんなライトの笑顔を見て、心から安心する。そして葵の瞳から一滴の涙が零れ落ちた。

(ライトの本当の笑顔だ)

その笑顔は優しくて温かい、そしてぬくもりのある笑顔だった。すると突然、ライトの姿が薄くなり始めた。

(・・あれ？)

涙のせいだと思い、拭つてみてもライトの体はどんどん薄くなつていいく。

すると葵の様子に気づいたライトが、静かに口を開いた。

「・・・もう葵ともお別れみたいだ」

「・・・？」

「その涙。その涙が証拠だよ。心の闇が消えたんだね。だからもう僕たちを見る」とはできない・・・でも他人のために涙を流すことができるのはとても素晴らしいことだから、その気持ち、忘れないで」

ライトがそう言つ終わると同時に、その姿は完全に見えなくなつた。

「・・・」

葵はただ、ライトがさつきまでいた場所をじつと見つめることしかできなかつた。

確かにそこにライトがいたはずなのに、今はもう見えない。葵の瞳から零れ落ちる涙は、葵自身にも止めることはできなかつた。

「葵ちゃん、どうしたの？」

美森が葵の様子を見て、心配そうに声をかけた。

「・・・」

葵は震える声で、しかし美森の瞳をしつかりとじらえて言つた。

「・・・とても優しいお兄さんなんですね」

それを聞いた美森は驚いたように目を見開くと、優しく微笑んだ。「うん。私、お兄ちゃんのこと今でも大好きよ。今回は会えなかつたけど、きっといつか会える、そんな気がするんだ」

そして美森は空を見上げた。そして呟くように言つた。

「まぶしいけど、とても綺麗な青空。お兄ちゃんの笑顔みたい」

「・・・」

そして葵も美森と同じ空を見上げた。

(空つてこんなに綺麗だったっけ?)

そこには今まで葵が気づかなかつた、たくさんヒカリが溢れて

いた。

「俺に何の用だ？・・・アルシス」

アフューカスは、灰色の部屋の灰色の椅子に腰を下ろすと、目の前に立ちすくんでいる女性ーアルシスに重みのある声で言った。

アルシスは唇をかみ締めると、声を絞り出した。

「もうこれ以上、ライトを苦しませないで下さい・・・」

アフューカスはその言葉を聞くと、嘲笑うかのよつた笑みを浮かべた。

「何。それならもう心配ない。ライトには違う人間を探すように言っておいた・・・今回の人間はライトでもてこずつたみたいだしな」

「・・・」

「俺もさすがに待ちくたびれた・・・人間を代えたほうが結果的に早く終わるだろうよ」

そして口元に奇妙な笑みを浮かべると言った。

「見つけるのは簡単はずだ・・・人間は必ず心に闇を持つている。そうだろ？・・・アルシス」

「えつ？！魔界の人気が見えなくなつたの？」

朝の登校中、隣を歩いていた世紀が驚くよつた声をあげた。

「・・うん」

「ほんと？よかつた！」

世紀は嬉しそうに微笑む。それを見て、葵も嬉しくなった。

「また見たい〜！！」とか言うんじゃねーぞ！久保田！」

突然、背後から聞き覚えのある怒鳴り声が聞こえてきた。振り向くとそこには繁樹がいた。

「良かつたじやん〜！」

そう言つと、葵の背中をバシンと叩いた。

「痛いんですけど・・・」

繁樹は葵の言葉が聞こえなかつたように、一人を抜かして歩いて行く。

「・・・・・」

隣で世紀が微笑んでいるのが視界に入った。

授業中、葵は空を見上げた。

真つ暗な夜空を眺めるのもすきだが、たまには明るい空を眺めてもいいと思う。

きっと夜空には無いものを青空では見つけられる。
真つ白な雲。

地上を元気に照らす太陽。

でも私はそんな雲や太陽が眩しそぎて時々嫌になる。
何で私とは正反対にあんなに輝いているのだろう。
そんなに私を明るく照らさないでほしい。

だから私は夜空が恋しくなる。

夜の闇は、私の汚れた部分をそつと隠してくれるから。
私はちつぽけな存在だつていいんだよ。と言つてくれるから。
でも、思うんだ。

いつまでも夜空を眺めてちゃいけない。

青空に輝いている太陽の光を浴びるのも必要なんだつて。

私にとつてその光は眩しすぎるかもしない。

けれど、心から笑えなかつた人が心から笑えた、そんな小さな変化みたいに、私もまぶしすぎるこの世界に少しずつでもいいから慣れていけばそれでいい。

そしてきっと見つけられるはずだ。今まで見つけようともしなかつた、新しいヒカリを。

end .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8692o/>

ヒカリ

2011年1月18日18時25分発行